徂徠集・序類　訳注稿（三）

岡本光生
澤井啓一

凡例

一、今回は次の六點を取上げた。

二火辨妄編序　巻之八／正德四年・一一九四

贈對書記雨伯陽敍　巻之十／正德五年・一九一五

送長藩醫仲邨玄與序　同前

惟適園六景敍　巻之八／同前

送左子嚴序　巻之十／同前

壽下館侯五十之初度序　巻之九／同前

なお、國思靖遺稿序（巻之八／正德四年）と送雨顯允序（巻之十／正德五年）は、日本の名著16『荻生徂徠』（中央公論社）に前野直彬氏の譯文が所收されているため、今回は割愛した。

二火辨妄編序

吾□國家昌大(1)融朗(2)之化(3)、於レ今爲レ盛(4)哉。維昔班鳩氏以前莫三得聞一己(5)。□列朝培植(6)、以馴三致寧(7)・平之際一、蓋已彬彬(8)云。然未下嘗有中能以三文事一乎抗三衡(9)華夏(10)一者上焉。迨三乎慶・元而還一、海內熙洽(11)、奎壁騰芒(12)(13)、文風所レ播、

縫[15]拔成レ林[16]、而洛陽□王宅[17]、最稱二人文之淵藪[18]一也。當二其時一、惺窩・羅山諸公[19]、世所謂大師[20]者、資已英特[21]、學復閎博[22]、加以レ乘レ時[23]而起、爲二世木鐸[24]一。是其才足下以凌二厲[25]一方[26]一、睥中睨[27]中土上[28]矣。而尚且一意祖述[29]、罕有二掎齕[30]一、雖則其德之謙讓未レ遑[31]乎、惟時爲レ爾[32]。自レ斯之後、愈益炳斐[33]。至二於伊維楨[34]、首二倡古義[35]一、而濂閩之敎[36]、士子弗レ屑[37]。雖レ然、是乃薦紳先生[38]之徒耳。今讀二芳恂益一火辨妄編一、則李唐以下醫師[39]皆廢[40]矣。夫方技[41]之士、而至二斯極[42]一也、亦惟時爲レ爾。不佞茂卿[43]、於レ是乎喟然嘆[44]、乃興西顧[45]而言曰、異哉時[46]乎[47]。唐虞[48]三代[49]、聖人用レ敎之邦、而鞠爲二胡土[50]一。文之與レ時、闇茀[51]幾二乎熄一。其衰也若レ斯其甚矣乎[52]。夫有レ低必昂、詘二乎彼一伸二乎此一。維楨・恂益文之屬也、不レ過二十年一、文其將二大萃[53]於吾□東方一耶。吾又聞恂益它著述[54]、升二聞□九重[55]一、藏[56]二諸群玉之府[57]一。芻蕘[58]弗レ弃、邇言必察[59]。盛德之事[60]、復見二今日一。夫上有レ好レ之、下必有二甚レ焉者一、是足二以知二風之自一[61]哉。恂益字慄父[62]、隱二於北山一、好學[63]君子醫也。价二其友江兼通一、千里齎レ幣[64]、問二業於予一、已卒。其孤玄詢又不レ遠二千里一[65]、奉二其遺命一[66]、問二序於予一。予素昧二醫理一[67]、且恂益之意、若謂レ矣二夫非レ非者一焉爾乎[68]、則予何言[69]。故予且識二其大者一、以推本二諸吾□東方文明之運云爾[70]。[71]

〔語　注〕

(1)易・繫辭下＜治而不忘亂、是以身安而國家可保也＞、書・立政＜相我國家＞。(2)詩・閟宮＜俾爾昌而大＞。(3)(木華)海賦＜三光既清、天地融朗＞、舊唐書・玄宗紀贊＜景氣融朗＞。(4)論語・泰伯＜唐虞之際、於斯爲盛＞。(5)史記・貨殖傳＜夫神農以前、吾不知已＞。(6)宋史・盧秉傳＜材木、非培植、根株弗成＞、金史・韓企先傳＜專以培植奬勵後進、爲己責任＞。(7)易・坤＜馴致其道、至堅冰也＞。(8)論語・雍也＜文質彬彬、然後君子＞。(9)史記・孔子世家＜臣聞有文事者必有武備、有武事者必有文備＞。(10)漢書・陸賈傳＜欲以區區之越與天子抗衡爲敵國、禍且及身矣＞。(11)書・武成＜華夏蠻貊＞。(12)(班固)兩都賦序＜海內清平、朝廷無事＞。(13)(班固)東都賦

〈至永平之際、重熙累洽〉。(14)玉海〈琬琰騰華、奎壁奮芒〉。(15)禮記・儒行〈丘少居魯、衣逢掖之衣〉。(16)後漢書・張衡傳〈于玆搢紳如雲、儒士成林〉。(17)（薛士隆）唐風賦〈王宅中都、深嚴九重〉。(18)易・賁〈文明以止人文也〉。(19)書・武成〈爲天下逋逃主、萃淵藪〉。(20)漢書・儒林傳論贊〈一經說至百餘萬言、大師衆至千餘人、蓋祿利之路然也〉。(21)宋書・武帝紀〈龍顏英特、天授殊姿〉。(22)史記・禮書〈化隆者閎博〉。(23)(玄宗)幸蜀西至劍門詩〈乘時方在德〉、漢書王莽傳上〈乘時侈靡〉。(24)論語・八佾〈天將以夫子爲木鐸〉。(25)(班固)覽海賦〈遵霓霧之掩蕩、登雲塗、以凌厲〉。(26)詩・汾沮洳〈彼汾一方、言采其桑〉。(27)莊子・山木〈雖羿蓬蒙、不能睥睨也〉、史記・魏其武安侯傳〈辟倪兩宮閒〉、後漢書・仲長統傳〈睥睨天地之間〉。(28)(韓愈)重答張籍書〈今夫二氏行乎中土、蓋六百有餘年矣〉。(29)管子・內業〈一意摶心〉。(30)中庸〈仲尼祖述堯舜〉。(31)史記・田儋傳〈齮齕用事者墳墓矣〉。(32)漢書・賈誼傳〈文帝謙讓未皇也〉。(33)孟子・公孫丑上〈惟此時爲然〉。(34)後漢書・荀彧傳〈將軍首唱義兵〉、晉書・藝術傳〈丘明首唱敍妖夢以垂文〉。(35)史記・張湯傳〈湯決大獄、欲傳古義〉。(36)詩・北山〈偕偕士子、朝夕從事〉。(37)孟子・告子上〈乞人不屑也〉。(38)史記・五帝本紀〈薦紳先生難言之〉。(39)(周敦頤)愛蓮說〈自李唐來、世人甚愛牡丹〉。(40)周禮・天官・醫師〈醫師、掌醫之政令、聚毒藥、以共醫事〉。(41)漢書・藝文志〈方技者、皆生生之具、王官之一守也〉。(42)莊子・大宗師〈然而至此極者、命也夫〉。(43)左傳・成公一三年〈寡人不佞〉。(44)論語・先進〈夫子喟然歎〉。(45)詩・皇矣〈乃眷西顧〉。(46)左傳・成公二年〈異哉〉。(47)史記・淮陰侯傳〈時乎、時不再來〉。(48)史記・孟荀傳〈孟軻乃述唐虞三代之德〉。(49)詩・小辯〈鞠爲茂草〉。(50)(揚雄)劇秦美新〈道極數殫、闇忽不還〉。(51)易・繫辭上〈易不可見、則乾坤或幾乎熄〉。(52)論語・述而〈甚矣、吾衰也〉。(53)新唐書・曆志〈鶉火直軒轅之虛、以爰稼穡、稜星

繫焉、而成周之大萃也〉。(54)漢書・賈誼傳贊〈凡所著述五十八篇〉。(55)書・舜典〈玄德升聞〉。(56)楚辭・九辯〈君之門以九重〉。(57)玉海〈如遊群玉之府〉。(58)詩・板〈先民有言、詢于芻蕘〉。(59)中庸〈舜好問而好察邇言〉。(60)漢書・王褒傳〈此盛德之事、吾何足以當之〉。(61)孟子・滕文公上〈上有好之者、下必有甚焉者矣。君子之德風也、小人之德草也〉。(62)中庸〈知遠之近、知風之自〉。(63)論語・雍也〈未聞好學者也〉。(64)周禮・天官・外府〈共其財用之幣齎〉、史記・鄭當時傳〈鄭莊行千里、不齎糧〉。(65)孟子・梁惠王上〈叟、不遠千里而來〉。(66)論語・述而〈伯夷・叔齊何人也〉、集注〈其父將死、遺命立叔齊〉。(67)古今醫統〈粗工昧理、曰庸醫〉。(68)書・益稷〈都、帝、予何言〉。(69)論語・子張〈在人、賢者識其大者〉。(70)史記・曆書〈推本天元、順承厥意〉。(71)易・乾・文言〈見龍在田、天下文明〉。

二火弁妄編の序(1)

わが国家の輝かしくも偉大な化育は、いまこそ盛んである。そのむかし、聖徳太子(2)以前の事柄はわからないが、その後の歴代の朝廷は、人材を養成し、奈良・平安時代となると文化は盛大になったという。しかし、いまだかって文事をもって中華に拮抗できるものはいなかった。慶長・元和に至ってよりこのかた、わが国内は安らかに治まり、文運は湧上がり、文風は巻上がり、儒服をまとう文官が輩出した。なかでも京都は、王の居処であり、文化のもっとも集まる所と称せられた。その時にあたって、藤原惺窩・林羅山の諸公など、すなわち世に謂う大師（大先生）は、素質が優れているうえに、学問にもまた広く、さらに時に乗じて興起し、世の木鐸となった。その才能は日本を圧倒し、中国を睨むに充分であったが(3)、しかし、ひたすら祖述に専念し、批判めいた見解を述べることはほとんどなかった。謙遜の気持ちもあったかもしれないが、むしろ「時」のしからしむところであったろう。その

後、〔文運は〕ますます光り輝き、伊藤仁斎が「古義」を提唱するにいたって、学を志す人びとは朱熹の教をこころよしとしなくなった。とはいうものの、それは学者の仲間に限られたことであった。

今、芳恂益[4]の「二火弁妄編」を読んで、唐時代以後、医学の廃れてしまったことを知った。「方技の士[5]」がこのように極端なところにまで堕落してしまったのも、また「時」のしからしむるところなのだ。私、茂卿はここにおいて感嘆嘆息し、興じて西方を顧み言った。

《「時」が異なってしまったのだなあ。〔中国は〕唐虞三代には、聖人が教えを用いた地域であったのだが、窮して夷狄の支配するところとなってしまった[6]。「文」は、「時」とともに衰退し、ほとんど滅びようとしている。まさに衰退の極致である[7]。〔しかし〕そもそも、低くなれば、必ず昂まり、彼の地で屈すれば、此の地で伸びるものだ。仁斎・恂益は「文」にかかわる人々である。十年もたたないうちに「文」はわが東方に集まるであろう。恂益の他の著作が朝廷にまで聞こえ、その府に蔵せられたという。〔今日、朝廷は〕樵[8]〔のような身分の低いもの〕の言葉も捨て去らず、卑近な言葉をよく見通している。盛大な徳が、今日ふたたび見られるのだ。そもそも、上に立つものの好みを下のものが見習い、いっそう励んで行うものなのであるから、〔下のものの好みを知れば〕上に立つものの在り方がわかるのだ[9]》。

恂益、字は慄父、北山に隠遁する学徳秀れた医者である。友人江兼通[10]（入江若水）を介して遥か遠方から幣をもたらし弟子の礼をとって、その仕事について尋ねてきたが、すでになくなってしまった。その子玄詢[11]もまた遠い隔たりをものともせず父の遺命を奉じ、私に序文を乞うて来た。私は、もともと医理にくらい。そして恂益の意志が、自序にあるように先人にたいする本書の批判に誤りがあれば、指摘してほしいという[12]ことであるならば、私は何も言えない。〔しかし〕私は、恂益の大きな志をおおよそ理解したので[13]、そこで

この書をわが東方の文明の変遷との関連で論じ、以上のように述べたのである。

〔訳　注〕

(1) 弁妄篇、概聖篇、考證篇の三篇からなる書。「二火」は「黄帝素問」に「君火以名、相火以位」とみえる概念。このうち弁妄篇はたとえば「駁王太僕」「駁陳無擇」というように「二火」に関する先人の学説に反駁する体裁をとっている。恂益の自序には「余家世業乎医、少而好読素難、至晩未輟焉。嘗疑宋元以来諸子、論君火相火三焦、大乖経旨也。於是上質諸素難、下證諸仲景・叔和、弁駁討論、以著二火弁妄三篇」とある。自序は元禄一六(一七〇三)年、名古屋玄篤の序は正徳四(一七一四)年、徂徠の序も正徳四年の日付をもつ。正徳五(一七一五)年に刊行。

(2) 「斑鳩氏」は聖徳太子を指す。原文に「班」とあるのは誤刻であろう。なお、わが国の文明の盛衰について、奈良・平安時代を一つのピークとし、次に家康による天下統一以後をその絶頂期とする徂徠の見解は「叙江若水詩」にもみられる。

(3) 「その才能は日本を圧倒し、中国を睨むに充分であった」とするほど藤原惺窩、林羅山にたいする徂徠の評価が高かったかどうか、疑問も残る。したがって、原文の「一方」を京都、「中土」を日本と解釈すべきかもしれない。ただ「中土」は一般的には中国を指し、徂徠において日本を「中土」と指した例があるかどうか、未見である。なお、山鹿素行に「中朝事実」(一六六九年)がある。

(4) 芳村恂益、京都の医者。幼仙と号した。「古医方」を唱えた名古屋玄医の門に学ぶ。著書に「内経綱紀」、「北山医話」などがある。

(5) 漢書芸文志は「方技者、皆生生之具、王官之一守也」としている。徂徠は「学則」において、「諸子百家九流之言以仏老之頗、皆道之分裂已」とし、また、本稿に収めた「送長藩医仲邨玄与序」では「血

肉の体を葆ち、性命の寄を全う」せしめる医術を帝王の治の一部として位置づけている。

(6)　古代中国は「聖人用教之邦」であったが、「夷狄」に支配された現代中国（清朝）はそうではないのだ、すなわち中国自体の変質という視点がここにみられるが、こうした視点はこれまで明確には見られなかったものである。なお、「学則」には「古有聖人。今無聖人。……蓋自秦漢而後、莫有聖人」(四)、「自秦以功令治天下、礼楽泯焉」(五)とあって、秦漢以後の中国がそれ以前の中国とは異質なものであるとする見解が見られる。

(7)　中国でまさに亡びようとしている「文」が、日本でまさに興起しようとする、という発想は「賀香国禅師六十叙」にも見られる。そこでは「司馬遷、班固、韓愈・柳宗元などの唐宋八大家、李攀龍・王世貞などの明の七子らの文章の風格と色調を具現している」のが、香国禅師の文だとされている。

(8)　「二火弁妄」には「北山　芳樵隠恂益傑　甫　批」とある。

(9)　上のものの好みを下のものが模倣する、という論は「叙江若水詩」にも見られる。

(10)　入江若水については「敍江若水詩」の訳注(1)を参照のこと。芳村恂益がかれを介して「二火弁妄」の文章表現及び内容の両面にわたる批評を求めたことについては江若水宛第六書(正徳二年)、第七書(三年)、第八書(三年)、復芳幼仙書(四年、梅雨の頃)にみられる。徂徠はこの依頼に消極的であったようだが、再三にわたる要請に復芳幼仙書のなかで遅延を「憶不佞嘗書伊仁斎、而仁斎不報。予至于今薄其為人矣。今而不畢罄其愚陋、以酬足下、則足下其亦謂之何也。祇以去歳而還、旧朝諸公、修憲廟実録、属予起草、刀筆紛拏、日不遑給。而高束閣上、莫由紬繹。深嘆其負千里外曼領之望已。是日偶値史事稍暇、則輒従事丹鉛」と弁明している。

さらに「二火弁妄」の文章表現及び内容について「其辞語之或議者、就注於行間。若或義理之所未信

者、則条列別幅」として、かなり批判的な言辞を記している。この返書を書いた後、幼仙死去の消息が子息の玄詢を通して徂徠に届き、かくて草卒の間に序文をしたためたのであろう。なお、「徂徠年譜考」（平石直昭）二〇六頁参照のこと。

(11) 恂益の子。延宝六（一六七八）年に生まれ、宝暦七（一七五七）年に死す。医を名古屋玄医に、儒を伊藤仁斎に受ける。

(12) 「非非」という表現は自序に「乃自知不有王充・宗元之才、而妄弁古人之非、則又必有非非者従其後也。雖然或非或非非、以能使二火三焦、得義精理明、則天下公論因此而定者、不可得知焉。公論有定、則夫所謂乖経旨者、及非之者、非非者、亦皆同為軒岐之忠臣矣」と見える。

(13) 「故予且其大者」は「論語」子張篇に「賢者識其大者、不賢者識其小者」とあるのに基づくであろう。この句の「識」について、朱子は「識、音志。識、記也」と解釈し、徂徠は「識、謂能名言之也。如識人知人之分。朱子、識音志。不必爾」としている。また「訳文筌蹄」では「知」と「識」の区別について「二字トモニシルト訓ズ。大抵ハカハルコトナク通用ス。シカレドモ差別アリ。知人知己ナド皆深ク知ルコトナリ。識名識面ハ見知ルコトナリ」としている。（岡本）

贈二對書記雨伯陽一叙

對府書記(1)雨君伯陽、以二辛・壬歳一、從二其府公(2)一、儐二韓使一東來(3)。於レ是乎始識二孝孺赤關之館一、爲二曹丘生(4)于吾黨(5)也。越二年(6)、歳在レ甲(7)、又奉二府公之命一東來。於レ是乎始訪二余牛門之廬一、俾二其子顯允行一東脩(8)于門下(9)一也。厥明年(10)、歳在レ乙(11)、君竣レ事(12)將レ歸。余執レ臂(13)而言曰、勖哉(14)雨君、將レ毋二賢勞(15)一與。雖レ然、士之生二於斯世(16)一、而獲レ用二其材一者、豈不レ幸哉。雨君勖哉。蓋自下有相氏以二馬上一(17)定中海内上(18)、而歴代(19)相承、控弦(20)成レ俗、

事無二大小一、一切武斷[21]、亡レ事二乎文字一矣。及レ至二口神祖龍興[22]、崇二尚墳[23]・素一、凡百制度[24]、監二於二代一、郁郁乎文[25]。海内靡然鄉レ風[26]者百二年于玆一。然猶尚政因二其民一[27]、民不レ改レ俗、操觚[28]之士、廛廛乎獲レ用二其材一焉。口朝廷[29]之上、金馬・玉堂[30]之署、是則亡レ論已。海内侯國以レ百數[31]、國有二文學一[32]、莫レ非レ具レ職、卽其横レ經[33]語レ聖、何有二乎脩レ辭[34]。若或登レ高作レ賦[35]、摛藻若二春葩一[36]、聊以自娛[37]、何取二乎大夫一哉。故當今之世[38]、文士[39]之用二其材一、亡レ已乎[40]、則外交耳。夫我之稱レ邊者四。東鄰二毛人一[41]、松前氏治焉。南通二中山一、薩藩之所レ轄、之二者業已爲臣妾[42]於我一焉。廼其地寒暑[43]弗レ交、其俗獷馴或殊、均レ之蕞爾[44]彫國[45]。有レ事則不レ足レ煩二一旅一、亡レ事則不二敢自從二諸侯之後一、而我長吏[47]之所二以道二達口上德意一[48]者、一比二諸内郡一[50]、亡レ假二于辭命一[51]矣。西則崎陽[49]、海外華・夷[52]、萬國[53]所二來湊一、海内五民[54]所二爭趨一、最稱レ難レ治。而口國家特設二塡臺一[55]、戍以二二侯國之兵一、時時又遣二參政[56]・執法之臣一[57]、以巡二按之一[58]。是其於二諸邊一、豈可レ不レ謂レ重乎。然以レ余觀レ之、宜レ莫レ若二對府重一焉乎爾。夫諸夷瓚矣、華夏[59]永樂之後、明既絶レ我、我又絶レ清。廖廖[60]乎莫レ有二戎好[61]之交一、尚何用二禮辭[62]一、亦唯民與レ民之交征レ利[63]、其稱レ難レ治者、廼漢日南・合浦類耳。對府則不レ然。蓋實司二我北門[64]管籥一[65]、相二距韓二百里而近。韓北接二匈奴一、西連二壤華夏一。其介二乎二大國一[66]、猶二之春秋鄭一乎。鄭以二辭命一、韓亦以二辭命一、其人廼嫺二於文一也。然其于レ我也、以レ地則醜、以レ勢則敵。又承二豐王威龕之餘一、則其所二以慮レ我者、深且備矣。唯我口國家柔綏之德也、而我猶且秉二世王之禮一[67]。萬一釁啓[68]、毋二廼弗レ有二齊襄九世之志一[69]乎。若或貢聘一絶、則人參繫二乎海内生靈[70]之命一矣。是其重、寧渠崎塡之君二臨華民一[71]、所二市二貨[72]、寶玩[73]機巧[74]之末一、而況毛人・流求、蒲二伏稽顙[75]乎松・薩小吏[76]之前一、以獻二其楮矢・魚服[77]・蕉布[78]・賧酒[79]、亡レ所二輕二重乎我一者一類哉。夫對府之重、爲レ最二於諸邊一、而韓以二辭命一嫺二於文一、其重廼一萃二于書記之任一。故對府書記、昔難二其材一、而以二雨君之材一、故易易[81]耳。雨君爲二書記一數十年、置二郵[82]于兩情之際一、其間夷險[83]盤錯[84]、必有二外人所レ不レ及レ聞者一、而名譽[85]著二海内一、重二于

三韓。夫對一侯國、雨君一陪臣[88]、以レ此其藐乎、而有レ關ニ乎ロ國家之大者一焉。海內操觚欲レ求レ見ニ其材一者、不レ可レ得レ獲、而雨君廼獲矣。豈非ニ天幸一邪。雨君雖ニ賢勞一乎、其亦盍下益修ニ其明德一[89]、以答中天之寵靈上[90]哉。若夫經明而行悼[91]、博學强識[92]、旁及ニ華音・韓語一、莫レ不ニ兼綜一[93]者、海內之人所レ悉。忠事禮接[94]、樂ニ敎育英才一[95]、福流ニ于家庭一[96]、蘭玉有レ茁[97]者、國人之所レ悉。超然遠覽[98]、不レ拘ニ流俗一[99]、有下取ニ諸狂簡一[100]、出中驪黃[101]之外上者、吾黨之所レ悉。余又何言。余故特言ニ其能獲ニ用其材乎國體[102]之大者一、以勖レ之爾。

〔語　注〕

(1)(任昉)齊竟陵文宣王行狀〈謀出股肱、任切書記〉、事物紀原・撫字長民部〈漢書百官志曰、王公及大將幕府、皆有記室、掌章表書記、…而未爲職名、唐開元元年、敕節度置掌書記、自後藩侯得自奏請也〉。(2)晉書・賈充傳〈府公南面坐〉、稱謂錄・總督〈案、唐幕僚稱節度觀察使爲府公、蓋沿六朝王府臣僚稱其主爲府公之舊〉。(3)(王昌齡)出塞行〈馬首東來知是誰〉、(姚合)送洛陽張員外詩〈餞客未歸城、東來騶騎迎〉。(4)漢書・季布傳〈布初不說辯士曹丘生、…布大說引爲上客〉。(5)論語・子路〈吾黨之直者異於是〉。(6)書・武成〈越三年〉。(7)爾雅・釋天〈歲在甲曰閼逢〉。(8)論語・述而〈自行束脩以上、吾未嘗無誨焉〉。(9)戰國・齊策〈齊人馮煖、使人屬孟嘗君願寄食門下〉、(司馬遷)報任少卿書〈僕與李陵俱居門下〉。(10)史記・萬石傳〈其明年、上廢太子〉。(11)爾雅・釋天〈歲在乙日施蒙〉。(12)國語・齊語〈有司已於事而竣〉、正字通〈竣、事畢也〉。(13)後漢書・呂布傳〈臨別把臂言誓〉、(劉峻)廣絕交論〈自昔把臂之英、金蘭之友〉。(14)書・泰誓中〈勖哉天子〉。(15)孟子・萬章上〈此莫非王事、我獨賢勞也〉。(16)孟子・盡心下〈生斯世也〉、同・萬章上〈於斯時也、天下殆哉、岌岌乎〉。(17)漢書・陸賈傳〈乃公居馬上得之〉。(18)孟子・梁惠王上〈海內之地、方千里者九〉、戰國・秦策〈詘强國、制海內〉。(19)後漢書・劉長卿妻

傳〈五更以來、歴代不替〉、（孔安國）古文尚書序〈是故歴代寶之〉。（20）史記・匈奴傳〈控弦之士三十餘萬〉。（21）史記・平準書〈或至兼幷豪黨之徒、以武斷於鄕曲〉。（22）（班固）西都賦〈周以龍興〉、（孔安國）古文尚書序〈漢室龍興、開設學校〉。（23）後漢書・黨錮傳〈自武帝以後、崇尚儒學〉。（24）易・節〈節以制度〉。（25）論語・八佾〈周監於二代、郁郁乎文哉〉。（26）史記・儒林傳〈靡然鄕風〉。（27）左傳・昭公七年〈務有三、一曰因民、二曰擇人、三曰從時〉。（28）（陸機）文賦〈或操觚以卒爾〉。（29）孟子・公孫丑下〈朝廷莫如爵〉、周禮・地官・保氏〈三曰朝廷之容〉。（30）史記・東方朔傳〈避金馬門〉、漢書・李尋傳〈久汗玉堂之署〉、（歐陽脩）會老堂口號詩〈金馬玉堂三學士〉。（31）史記・曹相國世家〈諸儒以百數〉、漢書・儒林傳〈延文學儒者以百數〉。（32）論語・先進〈文學、子游子夏〉、漢書・東方朔傳〈武帝初卽位、徵天下、擧方正賢良文學材力之士〉。（33）北齊書・儒林傳序〈横經受業之侶〉。（34）易・乾〈脩辭立其誠〉。（35）漢書・藝文志〈登高能賦、可以爲大夫〉。（36）（班固）答賓戲〈擠藻如春華〉。（37）莊子・讓王〈皷琴足以自娛〉。（38）後漢書・馬援傳〈當今之世、非獨君擇臣也、臣亦擇君矣〉。（39）戰國・秦策〈文士竝飭〉。（40）孟子・梁惠王上〈無以則王乎〉。（41）宋書・倭國傳〈東征毛人〉。（42）史記・酈侯世家〈此其君臣百姓必皆戴陛下之德、莫不鄕風慕義、願爲臣妾〉。（43）禮記・樂記〈寒暑不時則疾〉。（44）左傳・昭公七年〈蕞爾國而三世執其政柄〉。（45）藝林伐山故事〈影國、猶曰附庸〉、楊升庵外集〈影國猶曰附庸〉。（46）左傳・哀公元年〈有田一成、有衆一旅〉。（47）史記・高祖紀〈諸郡縣皆多殺其長吏〉。（48）禮記・月令〈道達溝瀆〉。（49）史記・秦始皇紀〈立石刻頌秦德明德意〉。（50）後漢書・南匈奴傳〈陳龜又欲從單于、近親於內郡〉、漢書・宣帝紀〈詔內郡國〉。（51）周禮・秋官・大行人〈協辭命〉、孟子・公孫丑上〈我於辭命則不能也〉。（52）詩・長發〈相土烈烈、海外有截〉、史記・孟軻傳〈因而推之、及海外人之所不能睹〉。（53）左

傳・哀公七年〈執玉帛而朝者萬國〉。(54)史記・貨殖傳〈臨菑亦海岱之間一都會也、…其中具五民〉。(55)易・繫辭下〈是以身安而國家可保也〉、事物紀原・學校舉貢部〈國家自神宗、專以經術取士〉。(56)(方回)詩〈往時參大政〉、宋史・職官志〈參政知事、掌副宰相、毗大政、參庶務〉。(57)周禮・春官・大史〈大喪執法〉、戰國・魏策〈執法以下〉・注〈執法、執政之臣〉、晏子春秋・諫上〈執法之吏〉。(58)唐書・百官志〈掌分察百僚、巡按州縣獄〉。(59)書・武成〈華夏蠻夷、罔不率俾〉。(60)(潘岳)寡婦賦〈仰神宇之寥寥〉、(左思)詠史詩〈寥寥空宇內〉。(61)詩・緜〈戎醜攸行〉・傳〈戎、大、醜、衆也〉、孔叢子・論政〈莫如除小忿全大好〉。(62)左傳・襄公十二年〈先王之禮辭有之〉。(63)孟子・梁惠王上〈上下交征利〉。(64)詩・北門〈出自北門〉、左傳・僖公三二年〈鄭人使我掌其北門之管〉。(65)晏子春秋・雜上〈管鑰其家者〉、晉書・陶侃傳〈自加管鑰〉。(66)左傳・襄公九年〈天禍鄭國、使介居二大國之間〉。(67)禮記・明堂位〈是故魯王禮也〉、後漢書・馬援傳〈而以王禮葬田橫〉。(68)春秋胡傳〈楚子不假道于宋、以啓釁端而圍之〉。(69)公羊傳・莊公四年〈紀侯大去國、…齊滅之、曷爲不言齊滅之、爲襄公諱也、…九世猶可以復讐乎〉。(70)晉書・慕容盛傳〈生靈仰其德〉、(孔穎達)毛詩正義序〈有益于生靈〉。(71)左傳・襄公十三年〈赫赫楚國、而君臨之〉。(72)易・繫辭下〈日中爲市、致天下之民、聚天下之貨〉。(73)淮南子・主術〈寶玩珠玉〉、唐書・阿間王孝恭傳〈寶玩不貲〉。(74)後漢書・張衡傳〈衡善機巧〉。(75)左傳・昭公十三年〈飲冰以蒲伏焉〉、史記・范雎傳〈膝行蒲伏〉。(76)禮記・檀弓下〈拜稽顙、哀戚之至隱也〉、左傳・昭公二五年〈平子稽顙曰、子若我何〉、荀子・大略〈至地曰稽顙〉。(77)史記・萬石傳〈爲小吏侍高祖〉、同・李斯傳〈年少時爲郡小吏〉。(78)詩・采薇〈象弭魚服〉、(張衡)東京賦〈白龍魚服〉。(79)後漢書・王符傳〈簏中女布〉注〈南越志曰、蕉布之品有三〉。(80)左傳・宣公三年〈楚子問鼎之大小輕重焉〉。(81)禮記・鄉飲酒義、

荀子・樂論〈吾觀於鄉、而知王道之易易也〉。(82)孟子・公孫丑上〈速於置郵而傳命〉。(83)世說新語〈常使兩情皆得彼此俱暢〉。(84)淮南子・本經〈直道夷險〉、(潘岳)射雉賦〈夷險殊地〉。(85)說苑・反質〈酒食珍味、盤錯於前〉、(曹植)輔臣論〈剖散盤錯、王司徒也〉。(86)孟子・滕文公下〈外人皆稱夫子好辯〉、荀子・法行〈而外人之親〉、(陶潛)桃花源記〈不足爲外人道也〉。(87)莊子・天運〈名譽之觀、不足以爲廣〉、墨子・修身〈此以名譽揚天下〉。(88)論語・季氏〈陪臣執國命〉。(89)詩・皇矣〈帝遷明德〉、禮記・大學〈在明明德〉。(90)左傳・昭公七年〈寵靈楚國、以信蜀之役〉、漢書・平帝紀〈賴天之靈、社稷之福〉。(91)漢書・王吉傳〈父子經明行修〉。(92)論語・雍也〈君子博學於文、約之以禮〉、禮記・儒行〈博學而不窮〉、同・曲禮上〈博聞彊識而議、敦善行而不怠、謂之君子〉。(93)(任昉)齊竟陵文宣王行狀〈罔不兼綜者與〉。(94)荀子・致士〈忠言・忠說・忠事・忠謀・忠譽・忠愬、莫不明通方起、以尙盡矣〉。(95)禮記・內則〈接以大牢〉注〈以大牢之禮接見其子〉、(杜牧)與崔大夫書〈自開幕府以來、辟取當事之名士、禮接待遇〉。(96)孟子・盡心上〈君子有三樂、…得天下英才而敎育之〉。(97)後漢書・鄭均傳〈常稱疾家庭〉。(98)世說新語・言語〈譬如芝蘭玉樹、欲使其生於階庭耳〉。(99)詩・騶虞〈彼茁者葭〉。(100)(班彪)王命論〈超然遠覽、淵然深識〉。(101)禮記・射義〈不從流俗〉、(成公綏)嘯賦〈愍流俗未悟、獨超然而先覺〉。(102)論語・公冶長〈吾黨之小子、狂簡〉。(103)詩・駉〈有驪有黃〉、列子・說符〈秦穆公謂伯樂曰、…對曰、牝而黃、使人往取之、牡而驪、…伯樂喟然太息曰、一至於此乎、是乃其所以千萬臣而無數者也〉。(104)漢書・成帝紀〈溫故知新、通達國體〉。

対の書記雨伯陽を贈るの叙[1]

対府（対馬藩）の書記雨君伯陽（雨森芳州[2]）は、辛卯・壬辰の年（正徳元年・二年）に、藩主に従い、韓（李氏朝鮮）からの使節を接待して東上した。その時、

赤関（下関）の宿舎において孝孺（山県周南）[3]と初めて知り合い、わが同人仲間のうちの〔季布の名をひろく喧伝したため上客に迎えられた〕曹丘生[4]となった。それから二年、甲午の年（正徳四年）に藩主の命によってまた東上したが、初めて牛門（牛込）[5]のわが家を訪れ、その子息顕允[6]を入門させた。ところが、明くる乙未の年（正徳五年）に、雨君は仕事を終えてまもなく帰国することとなった。

そこで、わたしは親しく腕を取り、次のように言う

――

《励んでくれ、雨君よ、仕事は骨の折れることだろう。しかし、今の時代に生まれた「士」にとって、その才能が用いられる以上の幸福はないはずだ。雨君よ、励んでくれ。

有相氏（源頼朝）[7]が武力によって国内を平定して以来、その後の為政者に受け継がれたために武事が習俗となり、あらゆることが武力によって決定され、文字によることはなかった。神祖（徳川家康）が興起して、三墳・八索〔という古典〕を重視するようになると、あらゆる制度が〔鎌倉・室町の〕二代に比べて華やかで優れた「文」になり、これまでの百年間に国内は徐徐にその影響を受けるようになってきた。とはいえ、政治は民人に左右されるのだから、民人の風俗が改まらないかぎり、「文学」に携わる者が才能を用いられることはほとんどないのだ。[8]朝廷の金馬・玉堂〔というアカデミア〕はもちろんのこと、百を数える諸侯の国々にも「文学」の職が置かれているが、経書を小脇に抱えて聖人について語ることはあっても、〔その本分である〕「修辞」に関与することはない。また、高殿に登って賦を作ったり、春の花のように美しい文章を作ったとしても、みづからの楽しみにはなっても、〔それより〕大夫として取りたてられることはない。だから、いまの時世では、「文」なる「士」が才能を発揮できる場は外交しかないのだ。

わが国が他国と境を接するところは、四ヵ所である。東は毛人（蝦夷）に隣接していて松前氏が治め、

南は中山（琉球）に通じていて薩摩藩が管理しているが、この二カ国はすでに臣下となっている。これらの国の土地柄はそれぞれに寒暑が偏っており、風俗は荒荒しさと穏やかさとで異なっているが、ともにわが国に隷属にしている小国である。[9] たとえ、事変が生じても大軍を派遣しなければならないほどではなく、何もなければすすんで諸侯の後に従うこともない。わが国の役人が、上（将軍）の徳にあふれた意向を広められるのは、これらの国を内郡（諸侯の領地）並みに扱っているからであり、「辞命」によるからではない。

西には、崎陽（長崎）があり、ここは華（中国）・夷（オランダ）など海外の多くの国々や国内の各地から人々がこぞって集まるから、もっとも治めるのが難しいところとされている。それゆえ国家は特に鎮台を設置して、〔黒田・鍋島の〕二大名の軍に守らせ、常に奉行以下の役人を派遣して治めさせている。[10] このように崎陽は他の国境と比べると本当に重要である。しかし、わたしが見るところでは、対府ほど重要な場所はない。〔毛人・中山などの〕夷は取るに足らない存在であるし、華夏（中国）との関係は、永楽帝以来明の方から断交し、〔その後は〕わが国の方から清と断交している。外交関係がない以上、「礼」に基いた「辞」を用いることもない。わずかに民間において利益の交換が行なわれているだけである。だから、治めるのが難しいといっても、漢が〔南方の〕日南・合浦[11]を治めるようなものである。

対府は、そうではない。まさにわが国における北方の関門を管理しているのであって、韓との距離は二百里という近さである。韓は、北は匈奴と接し、西は華夏に連なっており、二大国に挟まれていることでは春秋時代の鄭のようである。鄭は「辞命」によって〔大国の間を生き抜いて〕おり、韓もまた「辞命」によって〔大国の間を生き抜いて〕いるから、その人々は「文」に練熟しているのだ。しかも、韓とわが国とを比較すれば、風土はよく似ていて、国勢も匹敵している。また、豊王（豊臣秀吉）による武力の余波から、

わが国に対する警戒心もつよいばかりでなく周到である。〔今の〕国家の温和を徳によって、わが国を王として扱う礼を取っているだけであり、もし争いがおこれば、九代までも復讐を計ろうとした斉の譲公の志が必ずやあるにちがいない。そうなると〔韓からの〕貢ぎ物が途絶えることになるが、〔貢ぎ物である〕人参は国内の人々の生命に関わる大事な薬である。これは、技巧に富むにしても瑣末な品物を華民（中国人）がもたらす場所に長崎の鎮台が君臨していることに比べても、ましてや毛人・流求（琉球）が、松前藩や薩摩藩の小役人の前に這いつくばって、わが国にとって重要ではない楮矢・魚服・蕉布・賤酒などの品々を献上していることに比べても、比較にならないほど〔重要〕である。[12]

対府が他と比べて最も重要であるのは、韓が「辞命」を用い「文」に練熟しているからであるが、その重責はひとえに書記の職務にかかっている。だから、対府の書記は昔から人材に苦しんでいたが、雨君の才能をもってすればいともたやすいことであろう。雨君は書記を数十年にわたって務めており、両国の事情を熟知している。その間に生じた複雑で困難なことについては、外部の人間にはうかがい知れないこともあるだろうが、その名声は国内に鳴り響き、三韓（李氏朝鮮）からも重じられている。対府は一諸侯の国であり、雨君は一陪臣に過ぎないから、軽んじられるのかもしれないが、国家の「大」なることに関与しているのだ。国内の「文学」に携わる者は、その才能を示そうとして果たせないでいるが、雨君にはそれが可能である。これこそがまさしく「天幸」であろう。雨君よ、仕事は骨折れるだろうが、その優れた徳をさらに伸ばして「天之寵霊」[13]にこたえなければなるまい。

さて、〔雨君が〕学問・実践ともに立派であること、幅広い知識・教養の持ち主であること、さらに華音（中国語）や韓語（韓国語）も習得していて、あらゆることが身に備わっていること、これは〔日本〕国内の人すべてがよく知っている。また、忠義を尽くし、礼儀を尽くしていること、秀でた人材を教育するのが

楽しみであること、幸福な家庭と優れた子息を持っていること、これは対馬藩の人々がよく知っている。超然として遠方を見つめて卑俗な流行に惑わされないこと、志が大きくて瑣末なことに拘らないこと、これはわが同人仲間全員が知っていることだ。わたしがそれに加えて言うべきことは何もない。そこで、わたしは、「国体」[14]の「大」なることに雨君の才能が用いられていることを述べて、激励するだけである。》

〔訳　注〕

(1)　本文中の「明年、歳在乙」という一句から、正徳五（一七一五）年に成立したことがわかる。

(2)　雨森芳州、名は誠清、字は伯陽、号は芳州・橘窓など。寛文八（一六六八）年に近江国に生まれ、十八歳のときに江戸にでて木下順庵に学ぶ。のち、師順庵の推薦により対馬藩に仕え、藩行政・朝鮮外交に従事し、宝暦五（一七五五）年に八十八歳で没す。中国語・韓国語に堪能であった。正徳元（一七一一）年と享保四（一七一九）年、通信使が来日した際には、接待のため対馬から江戸まで同行している。正徳元（一七一一）年のとき、本文中にみえるように山県周南と知り合い、その後、徂徠らとの親交が始まった。なお、享保四（一七一九）年の通信使のなかに申維翰がおり、その著『海遊録』には李朝側からみた雨森芳州の人となりが記されている。

(3)　山県周南のことは、『訳注稿一』所収の「次公字叙贈行」に詳しい。また周南が通信使と交わした詩文は『問槎畸賞』に収められている。なお、正徳元（一七一一）年の通信使に関しては、広島藩儒の味木立軒（允明）と寺田臨川（鳳翼）が詩文を応酬し、『広陵問槎録』としてまとめ、徂徠に序文を求めていた。『訳注稿二』所収の「広陵問槎録序」を参照されたい。

(4)　曹丘生のことは、『漢書』季布伝に、次のようにみえる。

布初不説弁士曹丘生、生至揖布曰、楚人諺曰、得

黄金、不如得季布諾、足下何以得此声梁・楚間哉、僕与足下俱、楚人使僕游揚足下、顧不美乎、何距僕深也、布大説引為上客。

雨森芳州を曹丘生に譬えたのは、曹丘生が季布の名を世間に喧伝した漢代の故事のように、木下順庵門下である雨森芳州との交際が、徂徠をはじめとする護園一門の名を世に広めた大きな功績があったということである。

(5) 徂徠は、正徳元(一七一一)年に、茅場町から牛込に移転している。この間の考証は、平石直昭氏の『徂徠年譜考』に詳しい。

(6) 雨森芳州の子息顕允が徂徠のもとにいたのは、徂徠の「送雨顕允序」によれば、三ヵ月という短い期間であり、父雨森芳州の帰国とともに去っている。

(7) 『徂徠先生文集解』が源頼朝とするのに従う。内容上、頼朝であるのは間違いないと思われるが、なぜ「有相氏」と表現したのかについてはよくわからない。

(8) ここにみえる徂徠の現状認識は、すでに訳注を施した『徂徠集』の各篇に散見する。武断的な風俗と、政治はそうした民の風俗に従うという議論は、宝永元(一七〇四)年の「賀泰君五十序」にみえ、江戸になって文化が興隆したという議論、および、そうであっても詩文による人材登用が期待できないという議論は、若干のニュアンスの違いはあるものの、宝永五(一七〇八)年の「叙江若水詩」にみえる。なお、儒学者と「文」とに緊密な関連を認めた議論は、正徳元(一七一一)年の「賀香国禅師六十叙」にみられる。

(9) ここにみえる徂徠の琉球・蝦夷地に対する理解が何に基いているのかは、現在のところ不明である。

(10) 徂徠の長崎に対する理解は、宝永三(一七〇六)年の「送野生之洛序」にすでにみえる。こうした知識は、中野撝謙や鞍岡蘇山、さらには正徳元(一七

一一）年の「賀香国禅師六十叙」に名前が挙げられている岡嶋冠山など、長崎出身の人々から得たものと推測される。

(11) 日南は、いまのヴェトナム北部に漢が設置した郡のこと。『漢書』地理志下に朱吾・比景・盧容・西捲・象林の五県によって構成される郡を置いたという記事がみえる。合浦は、いまの広西自治区に漢が設置した郡のこと。同じく『漢書』地理志下に記事がみえる。

(12) 李氏朝鮮に対するこうした理解を徂徠がどのようにして得たのかははっきりしないが、すぐに想起されるのは、雨森芳州の「朝鮮風俗考」や「交隣提醒」である。これらの著述のなかで芳州は、李氏朝鮮のことをよく知る必要があると指摘するとともに、李氏朝鮮側の警戒心が依然強いのに対し、日本側にはそうした意識が弛緩していることを批判している。おそらく、徂徠の議論は芳州のこうした理解に依拠していよう。

(13) 「天之寵霊」というのは、いうまでもなく、享保二(一七一七)年成稿の『辨道』に、王世貞らの古文辞と遭遇したことを強調して述べた表現としてよく知られている。直接の典拠は不明であるが、語注において示したように、『左伝』昭公七年の「寵霊楚国」や『漢書』文帝紀の「頼天之霊」などであろう。徂徠の使用例としては、他に本篇と同じ正徳五(一七一五)年と推定される「与富春山人」第二書にもみえ、時期的に近いので留意したい。

(14) 徂徠がここで用いた「国体」は、もちろん、のちの水戸学などのような国体論における用法とは異なっている。しかし、徂徠の用法にしても、それが対外関係に関わる場面で用いられていることには注意する必要があろう。

（澤井）

送長藩醫仲邨玄與序

是歲夏六月、長藩之侍醫仲翁、造物子廬而別。迺言曰、不佞祇役于是都、期之日之餘者幾希。然困吾藩三尺、不能朝夕承教也。夫其咫尺萬里庸別焉。且也不佞髮鬖鬖然白、而寡君出命之不于常。庸識其臂可再把乎否也。方今會之日而離之日矣。子其何脩而可以比仁者之贈也。物子謝不敏、不可。則曰、以吾之拙乎醫而儒是跳、而迺馮媮者爲效、寧不貽爲士者姍笑乎。雖然、子以通家之誼、儼然辱臨之。是烏可終恝乎無言也。蓋吾之戒其弟、毋家于伎、毋以他善飾厥躬云爾。亦要其志之專已。今子亦知夫經方之爲賤伎、邪、不與士大夫伍也。苟愧焉則運耳。不愧焉則安耳。弗運弗安、依違乎二者之間、是伎之所由拙也。昔唐虞之世、不有垂・殳折暨伯與・夔・龍者哉。其它則亡聞焉。孔子謂夔、達樂而不達禮、謂之偏。夔之安于偏也、所謂毋以它善飾厥躬者也。載于書典、祭于學、稱揚于聖人君子之口、其偏而賤也亦安耳。降帝而王、周公之秩其禮、尚且秩醫于天官之屬、而它執垂・殳折暨伯與・夔・龍之伎者不與存焉。泝而上之、厲山氏之王天下、尚且屑屑然躬鞭赭其草木之區、而它禮樂文物之藝不與存焉。是其葆血肉之軀、以全性命之寄者、寧莫有以取諸帝王之治哉。而史之典于帝、毋論其有無關文、均之偏而伎也、亦夔之倫也。而伎之於道、其貴賤之別、昭昭乎不可誣焉。苟帝王而有耻諸、則其賤也亦安耳。夫自士農不復合、而其世祿者多子姓、其父母暨族長老、聚謀其室而曰、伯可嗣亡虞、仲若季、爲儒或醫乎僧乎。儒貧、僧勘生人樂、唯醫乎、可以致富、而貴人朋、其父母所冀欲廑此。而子之稱良者、亦能庚續其志云耳。迺毋論其術成不成、稱能目辯其參釜、口習高陽生若而行、輒從一奚奴背藥囊于後、來還街衢如織、以覬希旁觀以爲術行者。人則見以爲大售故匆遽迺爾。輒用腎腸、以試其毒、幸或已權貴富鉅豪者疾數四、聲遂隆隆然起矣。由此而

往、婁有二天倖一。不レ戾二于刀圭一、其糈可二以養一百口一者、蓋所二爲其術之成一也。次レ之、或値二數奇一、姑且舍二其刀圭之所一由靈一、務養二佼於王侯之間一。某也好二女樂一、某也濡レ首長夜飲、某也翩翩佳公子、頗瀟灑愛二歌詩一若二浮屠道一、某某也好二古鼎尊彝器一、若下相二劒與一古圖書一習レ爲二賞鑒家言一、某其腹心而爪牙、某其所二最憐一客、某可レ介、某辯且慧、可レ使レ游二大人一者、求レ知取レ友、羽翼漸生、蠅營蟻慕、百方以中二其欲一。於レ是乎五侯七貴坐上、皆有二君卿一也。而揣摩所レ成、游道益廣。是今之君卿者、安在二其諳一奇胲本草一哉。然其所二爲作一湯液餌疾一者、亦有二其術一乎存焉。方二其初接一也、務柔二其齊一、庶下乎莫レ有レ所二瞑眩一、可二以持久一、而偶倖之或獲上。及二曠日之鮮レ效、而彼其心怠一也、驟剛二其齊一、以爲二萬一之計一、將レ效邪、我收二其聲譽一、將レ毒邪、以嫁二禍于後人一。亟請而麿、以辟二其兌一、請而遄往、以擊二其惰一、潔二其去留一、以媚二外人一、溫二其顏色一、以媚二主人一、與二其有二殺人聲一、寧我藥之弗レ靈。而其心謂是足下以引二年都市間一、以聲問不レ衰矣。世蓋無レ醫哉。亦莫レ有二識レ醫者一、唯其都二衣冠一、而盛二騶從一、可二以聳二人之目一者、顧忿鍼、望愈尊、以俟下時所二稱爲一扁鵲一者死上、竟得二以承乏代一其人一也。是夫所二爲處一乎世一者、其知大且遠也。則與下其懸二壺一壺地一、招レ手聚二路上人一、以圖二錐刀之贏一者上、庸可二同レ日而語一哉。亦鄉者所謂家二于伎一之巧者也、謂之巧二于伎一者眩焉。雖レ然、世運一波、滔滔然不レ反、其先進與二後進一之相輩、若欲下執二方伎於其間一、以爲中都下第一人上、而不レ由二斯道一以有レ至焉者、不也。子欲レ之則爲レ之。若或其稍倖倖自憙者、其心則謂醫雖二方伎一、亦周時所レ稱レ爲レ士焉耳。既詩書禮樂、被二之四體一、是烏可レ廢邪。迺以二誦讀一敝レ精、擎跽束レ神、而其志之弗レ分、或尠焉。藥之性有レ所レ未レ核乎。欲二小試レ之、大傷二人生一、是不仁也。病之情有レ所レ未レ竟乎。彼怠而予猶且朝夕診二眎之一、數斯疏矣、是不義也。朝士之月執謁二閣老一、殆無二虛日一乎、而吾欲レ有レ所二厲一精于伎一、莫レ有二能時一其拜趨一、是無禮也。貧而疾者、疾二其貧一也、而吾欲レ有レ所レ衣二食之一乎、庶レ可二以已一其疾一乎、以破二我訾一而不レ足、是無知也。凡斯

仁義禮知四者、士君子[150]所二由以貴一者也、善之飾二厥躬一、莫二是過者[151]一也。而其于二方伎一、亡レ當也。故欲レ巧二乎方伎一者、莫レ若レ學二夫佝僂丈人一焉[152]。夫佝僂丈人者、賤之人也。承蜩[153]者、賤之伎也。方二夫其蜩是承一也、庸問二其伎之賤一哉、亦庸問二其我之賤一哉。名焉而不レ問、利焉而不レ問、百爾[154]翫[155]好嗜[156]欲焉而不レ問、唯蜩焉是レ問。莫レ有二外物[157]之攖二其心一[158]、莫レ有二它善之分一二其志一[159]、是伎之所二由以巧一者也。今夫方伎之承レ蜩也、孰大而小焉。方伎之士於二佝僂丈人一也、孰貴而賤焉。彼其小且賤也、猶且處レ心若レ是其安[160]、而用志若レ是其專[161]也。何也、伎不レ若レ是不レ巧焉。故今子欲レ巧二乎其伎一、則亦安二其賤一而已、亦專二其志一[162]而已。故吾蓋曰、毋レ家二于伎一、毋下以二它善一飾中厥身上云爾。吾之語二吾弟一者止レ是。而吾弟遂以レ是乎運焉。今復以語レ子。子也者、巧二乎其伎一者也。莫下用二吾言一爲上矣[163]。其亦以レ是而語二其子活也一[164]邪。吾故非下欲二活也之以レ是而運焉一者上也。雖レ然、吾之視二活也一、猶二吾弟一、而吾之所レ知者是耳也。故今復以語レ子。仲翁則憮然少[165]レ之曰、不佞今由二子之言一、而得レ聞下夫伎之所二由巧一與中其所二由興一者上焉乎爾。其歸而以語二之活也一邪。亦在二活也之所二擇而取一焉耳。遂書以爲レ贈[166]。

〔語　注〕

(1)史記・倉公傳〈除爲齊王侍醫〉。(2)左傳・成公一三年〈寡人不佞〉。(3)(謝靈運)鄰里相送方山詩〈祇役出皇邑、相斯憩甌越〉。(4)孟子・離婁下〈人之所以異於禽獸者幾希〉。(5)史記・杜周傳〈君爲天子決平、不循三尺法〉。(6)書・說命上〈朝夕納誨〉、詩・南無正〈邦君諸侯、莫肯朝夕〉。(7)孟子・梁惠王上〈寡人願安承教〉。(8)(杜甫)戲題畫山水圖歌詩〈尤工遠勢古莫比、咫尺應須論萬里〉。(9)(蘇轍)詩〈脫巾漉鬢鬖鬖〉。(10)左傳・昭公二年〈寡君命下臣〉。(11)左傳・成公一八年〈抑人之求君、使出命也〉。(12)書・康誥〈惟命不于常〉。(13)莊子・田子方〈吾終身與汝交一臂而失之〉、(劉峻)廣絕交論〈自昔把臂之英、金蘭之友、曾無羊舌下泣之仁〉。(14)漢

書・成帝紀〈方今世俗、奢僭罔極〉。(15)孟子・梁惠王上〈吾何脩而可以比於先王觀〉、孔子家語・觀周〈老子送之日、吾聞富貴者送人以財、仁者送人以言〉。(16)儀禮・士冠禮〈某不敏、恐不能共事〉。(17)孟子・盡心下〈馮婦、攘臂下車、衆皆悅之、其爲士者笑之〉、漢書・諸侯王表〈自任私知、姍笑三代、盪滅古法〉。(18)後漢書・孔融傳〈先君孔子與君先人李老君、同德比義而相師友、則融與君累世通家〉。(19)晏子春秋・問下〈夫儼然辱臨敝邑〉。(20)韓非子・說難〈直指是非、以飾其身〉。(21)漢書・藝文志〈經方者、本草石之寒溫、量疾病之淺深、假藥味之滋、因氣感之宜、辯五苦六辛、致水火之齊、以通開解結、反之於平〉。(22)(江淹)詣建平王上書〈備鳴盜淺術之餘、豫三五賤伎之末〉。(23)孟子・梁惠王下〈亦運而已矣〉。(24)漢書・律歷志〈書歛樂弛、朕甚難之、依違以惟、未能修明〉。(25)論語・泰伯〈唐虞之際、於斯爲盛〉。(26)孔子家語・論禮〈達於禮而不達於樂、謂之素。達於樂而不達於禮。謂之偏。夫夔達於樂而不達於禮。是以傳於此名也〉。(27)莊子・庚桑楚〈且夫二子者、又何足以稱揚哉〉、漢書・黃霸傳〈天子以霸治行終長者、下詔稱揚〉。(28)書・臯陶謨〈天秩有禮〉。(29)周禮・天官〈醫師、上士二人、下士四人、府二人、史二人、徒二人〉。(30)孟子・盡心上〈君子有三樂、而王天下、不與存焉〉。(31)禮記・祭法〈是故厲山氏之有天下也〉、漢書・郊祀志上〈有烈山氏王天下〉。(32)左傳・昭公五年〈屑屑焉習儀以亟〉、荀子・儒效〈屑然藏千鎰之寶〉。(33)史記・三皇本紀〈以赭鞭、鞭草木、始嘗百草、始有醫藥〉、論語・子張〈譬諸草木區以別矣〉。(34)禮記・王制〈同律禮樂制度衣服、正之〉。(35)左傳・桓公二年〈文物以紀之、聲明以發之〉。(36)(蘇舜欽)遷居詩〈況我有血肉、又生名利區〉。(37)後漢書・第五倫傳〈全性命〉。(38)莊子・天道〈夫帝王之德、以天地爲宗〉、莊子・秋水〈帝王殊禪、三代殊繼〉。(39)論語・衞靈公〈吾猶及史之闕文也〉。(40)易・繫辭上〈卑高以陳、貴賤位矣〉。(41)莊子・達生〈昭昭乎、若揭日月而行〉。

(42)國語・齊語＜昔聖王之處士也、使就閒燕、處工、就官府、處商、就市井、處農、就田野＞。(43)漢書・郊祀志上＜周始與秦國合而別、別五百載當復合＞。(44)書・畢命＜我聞、曰、世祿之家、鮮克由禮＞、孟子・滕文公上＜夫世祿、滕固行之矣＞。(45)儀禮・特牲饋禮＜子姓兄弟、如主人之服＞、禮記・玉藻＜縞冠玄武、子姓之冠也＞。(46)史記・司馬相如傳＜蜀長老多言＞。(47)後漢書・和熹鄧皇后紀＜碩惠加於生人＞、(曹松)己亥歲詩＜澤國江山入戰圖、生民何計樂樵蘇＞。(48)論衡・命祿＜轉貨致富＞。(49)呂氏春秋・重己＜世之人主貴人＞。(50)論語・學而＜父在觀其志＞。(51)左傳・襄公一二年＜夫婦所生若而人、妾婦之子若而人＞。(52)新唐書・李賀傳＜從小奚奴、背古錦囊＞、(李商隱)李賀詩集序＜恆從小奚奴、騎駏驢背＞。(53)史記・刺客傳＜侍醫夏無且以其所奉藥囊提荆軻也＞。(54)(應璩)與從弟君苗君胄書＜來還京都、塊然獨處＞。(55)(班固)西都賦＜內則街衢洞達＞。(56)(劉駕)詩＜世路密如織＞。(57)史記・三皇本紀＜旁觀鳥獸之文與地之宜＞。(58)南史・齊東昏侯紀＜比起就會、悤遽而罷＞。(59)書・盤庚下＜今予其敷心腹腎腸＞。(60)漢書・杜周傳＜數言得失、不事權貴＞。(61)開天遺事＜國中鉅豪也＞。(62)(揚雄)解嘲＜炎炎者滅、隆隆者絕＞、論衡・雷虛＜隆隆之聲、天怒之音、若人之呴吁矣＞。(63)史記・霍去病傳＜軍亦有天幸＞、(王維)老將行詩＜衞青不敗由天幸、李黃無功緣數奇＞。(64)神仙傳＜此是神丹、飲者不死、夫婦各一刀圭＞。(65)史記・李將軍傳＜李廣老數奇＞。(66)書・盤庚下＜肆予沖人、非廢厥謀、弔由靈＞。(67)禮記・月令＜養壯佼＞。(68)論語・微子＜齊人歸女樂、季桓子受之、三日不朝、孔子行＞。(69)易・未濟＜有孚于飲酒、天咎、濡其首、有孚失是＞。(70)史記・魏公子傳＜公子自知再以毀廢、乃謝病不朝、賓客爲長夜飲＞。(71)史記・平原君傳讚＜平原君、翩翩濁世之佳公子也＞。(72)(杜甫)飲中八仙歌＜宋之瀟灑美少年、舉觴白眼望青天＞。(73)新唐書・李白傳＜詔以白歌詩、裴旻劍舞、張旭草書爲三絕＞。(74)新唐書・柳渾傳＜兒相

夭且賤、爲浮屠道可緩死〉。(75)史記・大宛傳〈天子案古圖書〉。(76)輟畊錄・敍畫〈好事家與賞鑒家自是兩等家〉。(77)詩・兔罝〈赳赳武夫、公侯腹心〉。(78)詩・祈父〈祈父、予王之爪牙〉。(79)荀子・富國〈必將雅文辯慧之君子也〉。(80)易・乾〈見龍在田、利見大人〉。(81)史記・張湯傳〈務在絶知友賓客之請〉。(82)史記・留侯世家〈彼四人輔之、羽翼已成、難動矣〉。(83)詩・青繩〈營營青繩〉、(韓愈)〈送窮文〈蠅營狗狗、驅去復還〉。(84)莊子・徐无鬼〈羊肉不慕蟻、蟻慕羊肉、羊肉羶也〉。(85)魏書・蕭寶寅傳〈役萬慮以蠅營、開百方而羶逐〉。(86)漢書・元后傳〈五人同日封、故世謂之五侯〉。(87)(藩嶽)西征賦〈窺七貴於漢庭、譸一姓之或在〉。(88)史記・蘇秦傳〈期年以出揣摩〉。(89)史記・陳丞相世家〈齎用益饒、游道日廣〉。(90)史記・倉公傳〈受其脈書上下經・五色診・奇咳術〉。(91)漢書・樓護傳〈護誦醫經・本草・方數十萬言〉。(92)史記・扁鵲傳〈上古之時、醫有兪跗、治病不以湯液醴灑〉。(93)書・說命上〈若藥弗瞑眩、厥疾弗瘳〉。(94)戰國策・趙策〈曠日持久數歲〉、後漢書・魏囂傳〈曠日持久、以待四方之變〉。(95)論衡・命義〈有命、有祿、有遭遇、有幸偶〉。(96)注(94)に同じ。(97)詩・揚之水〈彼其之子、不與我戍申〉。(98)(白居易)詩〈與君萬一爲交代、留取甘棠三兩枝〉。(99)史記・張湯傳〈然得此聲譽〉。(100)史記・趙世家〈韓氏所以不入於秦者、欲嫁其禍於趙也〉。(101)老子〈塞其兌、閉其門〉、李衞公問對〈避其銳氣、擊其隋歸〉。(102)(陸機)文賦〈定去留於毫芒〉。(103)孟子・滕文公下〈外人皆稱夫子好辯〉。(104)論語・泰伯〈正顏色、斯近信矣〉。(105)易・明夷〈主人有言〉。(106)左傳・襄公五年〈已則無信、殺人以逞、不亦難乎〉。(107)(李商隱)嫦娥詩〈嫦娥應悔偸靈藥〉。(108)(韓愈)進學解〈訾醫師以昌陽引年〉。(109)漢書・食貨志〈商賈大者、積貯倍息、小者、坐列販賣、操奇贏、日游都市〉、漢書・翟方進傳〈皆礫暴于長安都市四通之衢〉。(110)孟子・離婁下〈故聲聞過情、君子耻之〉。(111)荀子・非十二子〈正

其衣冠齊其顏色、嗛然而終日不言、是子夏氏之賤儒也〉。(112)東齊記事〈上命特給騶從傳呼〉、(楊萬里)詩〈我行莫笑無騶從、自有西山管送迎〉。(113)(李商隱)哭遂州蕭侍郎二十四韻〈司刑望愈尊〉。(114)左傳・成公二年〈攝官承乏〉。(115)魏志・許允傳〈亦嘗以處世太盛戒允〉、晉書・郄愔傳〈會弟曇卒、益無處世意〉。(116)(謝朓)爲主啓則謝啓〈臣本布衣、不謀遠大〉。(117)後漢書・費長房傳〈市中有老翁賣藥、懸一壺於肆頭〉。(118)後漢書・隗囂傳〈復招聚其衆〉。(119)(杜牧)清明詩〈清明時節雨紛紛、路上行人欲斷魂〉。(120)後漢書・輿服志〈上爭錐刀之利、殺人若刈草然〉。(121)史記・蘇秦傳〈夫破人之與破於人也、臣人之與臣於人也、豈可同日而論哉〉。(122)晉書・武帝紀〈方今世運垂平〉。(123)(王羲之)題筆陳圖〈每畫一波、常三過折筆〉。(124)詩・載驅〈汶水滔滔、行人儦儦〉。(125)論語・先進〈先進於禮樂野人也、後進於禮樂君子也、如用之、則吾從先進〉。(126)漢書・藝文志〈方技者、皆生生之具、王官之一守也〉。(127)吳志・呂據傳〈以都下兵、逆據於江都〉。(128)梁書・劉孝綽傳〈第一官當如用第一人〉。(129)孟子・滕文公公下〈不由其道而往者、與鑽穴隙之類也〉。(130)論語・陽貨〈女安則爲之〉。(131)史記・魏其傳〈沾沾自喜耳〉。(132)禮記・王制〈樂正崇四術立四教、順先王詩書禮樂以造士〉。(133)孟子・盡心上〈君子所性、仁義禮智根於心、其生色也睟然見於面、盎於背、施於四體、四體不言而喻〉。(134)史記・留侯世家〈良常習誦讀之〉。(135)孟子・盡心上〈是之謂不知務〉集注〈豐氏曰、智不急於先務、雖徧知人之所知、徧能人之所能、徒弊精神、而無益於天下之治矣〉。(136)莊子・人間世〈擊跽曲拳人臣之禮也〉。(137)孟子・離婁下〈我必不仁也〉。(138)漢書・董賢傳〈至獄診視〉。(139)論語・里仁〈朋友數斯疏矣〉。(140)易・繫辭上〈不畏不義〉、孟子・公孫丑上〈行一不義、殺一不辜〉。(141)新語・懷慮〈朝士不商〉。(142)(揚雄)廷尉箴〈獄臣司理、敢告執謁〉。(143)新唐書・楊綰傳〈舍人年久者爲閣老〉。(144)左傳・襄公二九年〈史不絕書、府無虛月〉。(145)

漢書・宣帝紀〈厲精更始〉、漢書・循吏傳〈厲精爲治〉。(146)(薩都剌)溪行詩〈鯉鯽鮮大如江鱸、奉觴酌前拜趨〉。(147)詩・相鼠〈相鼠有體、人而無禮〉。(148)國語・鄭語〈同棄能播殖百穀蔬、以衣食民人者也〉。(149)詩・隰有萇楚〈天之沃沃、樂子之無知〉。(150)禮記・卿飲酒義〈卿人士君子、尊於房戸之間〉。(151)史記・張儀傳〈詿誤人主、無過此者〉。(152)莊子・達生〈其痀僂丈人之謂乎〉。(153)莊子・達生〈痀僂者承蜩〉。(154)詩・雄雉〈百爾君子、不知德行〉。(155)左傳・襄公二九年〈職貢不乏、玩好時至〉、晏子春秋・雜下〈好盤游翫好〉。(156)禮記・祭義〈心志嗜欲、不妄乎心〉。(157)莊子・外物〈外物不可必〉、荀子・脩身〈內省而外物輕矣〉。(158)莊子・在宥〈黃帝始以仁義攖人之心〉。(159)莊子・達生〈用志不分〉。(160)老子〈聖人治虛其心〉。(161)注(159)に同じ。(162)(徐照)送奭上人緣詩〈專志事皆成、期師此一行〉。(163)莊子・消遙遊〈予無所用天下爲〉。(164)禮記・檀弓上〈爲伋也者、是爲白也母〉。(165)孟子・滕文公上〈夷子憮然爲問曰、命之矣〉。(166)孔子家語・觀周〈吾聞富貴者送人以財、仁者送人以言〉。

長藩医仲邨玄與を送るの序[1]

今年の夏六月、長州藩の侍医仲翁[2]が、私、物子の廬に来て、別れを告げ、こう言った。

「私はこの都で仕事をしていたのだが、帰国の日まで残り少なくなってきた。しかもわが藩の規則に苦しめられて、〔あなたに〕朝夕教えを受けるわけにはいかない。近くにいても、遠くにいるのと何の変わりもない。さらにまた、私は年もとっているし、〔江戸へ行くようにと〕わが君が命令を出すのも、いつになるかわからず、ふたたび会えるか否か分からない。今日の会った日が別れの日である。どうか私に何か仁者の贈り物に比すべきもの（言葉）を贈ってはくれまいか」と。

私、物子は謝絶したが、是非にというので次のように言った。

《私は、医術に拙く、儒者に逃避したのだ。馮婦がかって得意であったことを行えば、士たる者の失笑を買ってしまうだけではないか[3]〔それと同様私が医術にロをはさめば、みなの笑い者になってしまう〕。とはいうもののあなたは父祖の代からのよしみで鄭重にも私を尋ねてくださったのだから、どうして最後まで無言でいることができようか。私は、貴人の御機嫌とりに巧みになるなかれ、「他善」を以てみずからを飾るなかれ、とわが弟[4]を戒めたのだが、それは「志を〔医に〕専らにせよ」ということであった。そして私は次のように述べたのだ――

いま、きみは医術が卑しい技で、士大夫と対等ではない、と考えている。もし、それを恥じるならば、〔医術を止め、他の仕事に〕移ればよい。恥ずかしくないと思えば、〔医術に〕安んずればよい。移るでもなく、安んずるでもなく、どちらともつかず、動揺しているから、技術が拙劣なのだ。

むかし、唐・虞の世、他のものたちについては何の記録も残っていないにもかかわらず、垂・殳斨及び伯與・夔・龍たちはとくに記録に残されているではないか。〔なぜにかれらのみが記録に残されたのであろうか〕。孔子は、夔について「楽には達してはいるが、礼には達していない。『偏』している」と述べている。夔の「偏」に安んじているのが、いわゆる「『他善』を以てみずからを飾るなかれ」ということである。〔かれらが〕書経（舜典）に載せられ、学校に祭られ、聖人君子に称賛されるのは、「偏」にして「賤」であるけれども、しかしまた一つの事に「安」んじていたからである。[5]

三皇・五帝の時代から下って、「王」の時代にはいると、周公がその時代の礼を秩序づけ、なおかつ医者を天官に属せしめたが、しかし垂・殳斨及び伯與・夔・龍のそれぞれの持つ技能を受け継ぎ、執り行うのたちは、天官の属に与からなかった。さかのぼってみると、神農氏炎帝が天下で王であったとき、さかんにみずから草木を（調べ、薬になりうるどうか）区分け

していたが、他の礼楽・文物に関係する技能にはかかわらなかった。[6] このようにみてくると、肉体を保持し、生命を全うせしめることは、帝王の治の一部分なのである。そして、史官が帝王について記録しているが、その記録に闕文があるか否かを論ずるまでもなく、そこではどの帝王もみなそれぞれに一つの技能に「偏」しており、〔だから三皇・五帝も〕また夔の類なのだ。しかし、技術には貴賤の区別のあることは、明白であって、ごまかし得るものではない。ただ帝王がこれを専らにしたのだから、たとえ賤しくても〔それに〕安ずるだけだ。

そもそも、士と農とが、〔分離し〕ふたたび結合しなくなって、世々禄を受けているものに子供が多くなってくると、[7] その父母や一族の長老は、一室に集って相談し、「長男は後を継げるので、何の心配もない。次男、三男は、儒者になるか、医者になるか、あるいは僧になるかだ。儒者は貧しく、僧は人間らしい楽しみを味わえない。ただ、医者だけが、金持ちにもなれるし、貴い人々とも友人になれる」と言うのだ。父母の希望することはこれだけであるし、子供でも「優秀だ」と評判のものは、やはりまたその気持ちを受け継ぐだけである。そこで、医術が成就したか否かにかかわりなく、朝鮮人参や黄金をすこしは弁別でき、〔みずからを漢の高祖に売り込んだ〕あの高陽の驪食其[8]の弁舌を学んで、そのように振る舞えるようになると、下僕に薬嚢を背負わせ街路をしきりに往来し、はたで観察しているものが、この医者は流行っているのだなと思うことを願う。人々はそれを見て、流行っているから、だからあのように急いでいるのだ、と思う。そこで、薬を用いて真剣に治療を試みる。さいわいにも、権力者、貴人、金持ち、有力者などの病気を直すこと、四回ぐらいを数えれば、名声はさかんに沸き起こる。こうして、しばしば幸運が続けば、患者の少ないということには苦しまず、その収入は、数多くの人々を養えるほどにもなる。医術の成せるわざである。あるいはまた、不運に出会って、なかなか流行らなけ

れば、しばらくは、医術のほうはおいておき、王侯の間に出入りする。だれだれは女性の舞楽が好きな人だ、だれだれは酒が好きで、一晩中飲んでいる人だ、だれだれは風流な貴公子で、仏道修行のようにさっぱりと〔俗世を棄て〕詩を愛している様だ、だれだれは刀剣や古書をみるように、古の銅器が好きで、鑑賞家の発言を真似する。だれだれは王侯の腹心であり、だれだれは王侯のもっとも愛する客人であり、だれだれは王侯の介添え役であり、だれだれは判断力に優れ、智恵がある〔などと関係する人々の特色を知り尽くし〕、王侯大人との交遊のきっかけを作ってくれる人には、積極的にこちらから知り合いになり、友人になる。かくて助けてくれる人がだんだんと生まれてきて、蠅がとびかい、蟻がむらがるように人々が集まって来て、いろいろな手段でその欲望を実現させることになる。かくて、王侯貴族の屋敷には、ことごとくあの漢代の名医樓護[9]〔字は君卿〕に類似するものがおり、こうしたことを探り出して、その結果交遊の範囲がますます広がるのである。これら今日の君卿は、〔ほんものの君卿とは異なって〕医の秘術や薬草についての知識すら諳じてはいない。しかし、その薬液や薬食を作る方法にも、またやり方があるのだ。〔そのやり方であるが〕患者にはじめて接するときには、薬を穏やかに調合し、目がくらくらしない程度で、ゆっくり効果が発揮されるようにし、偶然の回復を期待する。何日たっても効果があらわれず、患者の心臓が弱まっていくような場合には、急いで劇薬を調合し、万が一の幸運にかける。まさにそれが効果をあらわせば、名声をうることになるし、症状が悪化しても、別の医者に任せて、責任を転嫁する。難しい病気の治療には、何度か頼まれて、やっと重い腰をあげ、やさしい病気の治療には、頼まれれば、急いで出かける。「患者離れ」を潔くし、世間の評判を得、表情を柔らかくして人当たりをよくし、患者である主人に媚びる。「人殺し」という評判を得るよりは、薬がきかないほうがまだよいのである。そして内心、これが都会

で長年開業し、評判の落ちない秘訣なんだ、と思っている。

かくて、世の中にはおそらく〔医者らしい〕医者がいなくなってしまったし、また、〔医の本質〕を知るものもいなくなった。衣冠を立派にし、従者を盛大につき従え、人の目を峙たせるものは、顔に皺がよればよるほど、名声が上がり、当代の「扁鵲」[10]と称せられるものの死ぬのを待って、ついにその後釜にはいる。これこそ、世に処していくうえで、はるかに遠くを見通しているものである。狭い場所に店を開き、手で招いて、路上の人を集め、ほんのわずかの利を求めているものと、同日に語ることができようか。これは、やはり、さきのいわゆる王侯貴人の御機嫌とりに巧みなるものであって、これを技術に巧みなるものというのは眩惑されているのである。

とはいうものの、世の流れ、波は、滔々として反らない。昔も今も、医生たるもの、医術を執り行って、江戸で第一の人に成ろうと考えたら、このやり方によらなければ、至るものは無いのである。きみがそれを欲するならば、そのようにしたらよい。あるいは、いささか、軽薄に嬉しがるものは、心のなかで「医は〔たんなる〕技術とはいっても、やはり周の時代には、『士』であるといわれたのだ。だから詩・書・礼・楽をたえず身につけていなければならない」と思い、そこで書物を読み精力を消耗し、礼儀に神経を疲れさせる。心を分裂させ、専一でない人がほとんどだ。薬の性質に調べのついていないところがあって、すこし実地に試してみようとし、おおいに人の生命を傷つけてしまうのは、「不仁」というものだ。病気の状態がよくわからず、患者の元気がなくなってきても、相変わらず朝夕診察して、〔患者から〕疎んぜられるのは、「不義」というものだ。仕えているものは、月ごとに高位高官に拝謁しなければならず、ほとんど暇な日はないのだが、医者が医術の研鑽に忙しく、時を決めて診察に赴くことのできないのは、「無礼」というものだ。貧しい患者は、その貧しさに苦しんでいるが、そ

ういう人に衣食を与え、その苦しみを癒そうとし、わが財産のすべてを投げ出しても足りないのは「無知」というものだ。およそ、仁・義・礼・知の四つを身につけているからこそ、士君子は貴いのだ。身を飾るのに、これに過ぎるものはない。しかし、医術の研鑽にあたっては、是非ともしなければならない、ということではない。医術を修得したいものは、〔荘子達生篇にみえる〕あの佝僂の男を学ぶのが一番だ。

あの佝僂の男は、賤しい男であり、蟬をとることは、賤しい技である。しかし、蟬をとるときにおいては、どうして技の賤しさなど念頭にあろうか、また自分の賤しさなど念頭にあろうか。名も念頭にない。利も念頭にない。もろもろの好みや欲望も念頭にない。ただ蟬をとることだけが念頭にあるのだ。外物が心を乱すこともない。「他善」が志を分裂させるでもない。これこそが技の巧みなる理由なのだ。今、医術と蟬をとるのとどちらが「大」なることで、どちらが「小」なることであろうか。医術の士とあの佝僂の男と、どちらが「貴」で、どちらが「賤」であろうか。かれは「小」にして「賤」であるが、しかし、心を虚しくすること、このように安んじており、志を用いること、このように専一である。なぜなら、このようでなければ、技に巧みになれないからだ。だから、今、君が医術に巧みになろうと思えば、「賤」に安んじなければならないし、その志を専一にしなければならないのだ。だから私は「貴人の御機嫌とりに巧みになるなかれ、『他善』を以てみずからを飾るなかれ」と言ったのだ。

私が、わが弟に語ったのは、これだけである。そして、わが弟は、とうとう〔医術から他の方面へ〕移って行った。今、また、あなたに語るのであるが、あなたは、医術に巧みな人であるから、私の言を用いることはなかろう。あるいは、これを子の活にも語ってみようか。私は、もとより活がこれによって〔医術を棄て〕他の方面へ移ることなど欲していない。しかしながら、私は、活をわが弟のように思っている。そし

て、私が〔医術について〕知っていることは、これだけなのだ。だから、今、また、あなたに語ったのだ》。

仲翁は驚き、しばらくして言った。「今、あなたの言により、医術に巧みになる方法と身分の高い医者になる方法を聞くことができた。帰って活にこれを語ろう。この意見をどう判断するか、活の取捨選択にまかせよう」。

そこで書いて、ついに贈り物とする。

〔訳　注〕

(1)　正徳五(一七一五)年夏の成立と考えられる（平石氏「徂徠年譜考」一〇〇頁参照）。

(2)　萩藩の藩医中村玄与のこと。萩藩「閥閲録」によれば玄与の父玄春も長州藩の藩医で、寛文十（一六七〇）年に五十七歳で死亡。このことからすれば、玄与は徂徠よりかなり年長と推定され、徂徠の父方庵と交際があってもおかしくないし、息子の活を徂徠が「わが弟のように思う」というのも理解できる。なお、「与県次公第七書」（『徂徠集巻二十一。正徳五年の成立と推定されている）に「仲邑生瓜期、敬寓尺一足下」とあるところからすれば、山県周南と近しい関係にあったのだろう。なお、「徂徠年譜考」一八四頁参照。

(3)　つい昔の地金をだしてしまった馮婦の説話（『孟子』尽心下）は「送香州師序」にも引用されている。

(4)　萩生観、萩生方庵の三男として生まれる。宝永元(一七〇四)年、三五才のとき幕府の儒者となり、明律、度量衡、清朝事情などの研究に励んだ。宝暦四(一七五四)年死去。

(5)　徂徠の夔にたいする評価は「譐園七筆」に「禹治水、棄播穀、伯夷礼、夔楽、然後堯舜可用、天下治焉」、「八筆」に「后夔非舜所進二十二人之一邪。然夔達楽不達礼。又惑美妻而生不肖子。廼知堯舜選衆、自殊於後人也」、同じく「八筆」に「後世儒者、多謂后夔之於楽、巧於其伎。殊不知舜之造楽、后夔

力也。故以善楽論夔者、所見小也。以善作楽論夔者、所見大也」とある。さらに「辨名」上（徳一）には「如后夔之於楽、禹之於行水、稷之於藝殖、皆堯舜所不能及也」とある。

(6) 徂徠の神農氏をはじめとする（堯舜を除く）三皇五帝にたいする評価は「辨名」上（聖一）に「古之天子、有聡明睿智之徳、通天地之道、尽人物之性、有所制作、功侔神明、利用厚生之道、於是乎立、而万世莫不被其徳、所謂伏義神農黄帝、皆聖人也」とある。

(7) 「政談」（巻一）に「三代の古も、異国の近世も、亦我国の古も、治の根本は兎角人を地に着る様にすること、是治の根本也」とあるように、徂徠は武士の農村土着論を唱えた。しかるに、武士が農村から離れ、都市に居住する現状においては、武士の二、三男の失業問題ともいうべき問題が生じてくる。この点が「政談」（巻三）に「昔は御旗本の二男三男を（与力に）召出されるることなれども、近年は此事絶えたり。故に二、三男は唯養子の口有をねらひ居て、其内に年寄埒もなきになる類……」として指摘されている。

(8) 驪食其は高陽の人。弁舌をもって漢の高祖に取り入った。ことは史記驪生伝にみえる。

(9) 楼護、字は君卿、斉の人、代々の医者の家に生まれる。若い頃、医術を長安で修業し、貴人外戚の家に出入りした。医術の経典・本草・方術の書を数十万も暗誦していた。後、経伝を学び仕官、王氏一族に取り入り、ついに九卿に列した。漢書遊侠伝にその伝がある。

(10) 扁鵲は黄帝のときの名医の名。また春秋時代の名医秦越人をその名医ぶりから、扁鵲とよんだ。史記に秦越人の伝がある。

（岡本）

惟適園六景叙

惟適園者、肥藩大夫中瀨君之子文山、所(1)爲自命其園者也。園有六景、曰堆青嶂(2)、謂金峯也。曰積雪嶺、謂蘇山也。曰棲霞峯(4)、謂溫山也。曰聯華岡、曰漱玉谿(5)、曰度月橋。大夫君之弟幻華上人、與吾藩依子相厚善(6)。乃介依子、徵言於余。夫海西之與東關、其相距何啻三千里(7)。則余未能諳夫園爲何狀、而景之所暎發(8)何如也。然園之所爲命其名者、可得言已。聞大夫君十三時、斃其不共戴天之讐(9)于芥川上、藉是名顯西諸侯(10)、卒膺大藩之徵。可不謂孝子乎。孝子不匱、永錫其類(11)。文山之所爲適、可得言已。夫大夫君方斃其讐時、年僅十三、弱當不勝衣(12)、而其讐者世所謂桀驁丈夫(13)也(14)。以年僅十三、弱不勝衣、而與彼桀驁丈夫者、相抗(15)以斃之。方其時、豈復思後之名顯仕榮邪。何況聲色之娛(16)、溫飽(17)安佚(18)、以適其四體(19)者乎。亦惟適其心志(20)之所爲適已。今文山之所爲適乎園、余故未能諳其爲何狀也、景之所英發何如也。而顧其所爲自誇者、乃不在峻宇(21)・崇牆(22)・麗樂(23)・綺館(24)・奇卉(25)・怪石(26)・異禽(27)・珍獸(28)之間焉。獨以蘇・溫・金峯諸勝、遠者一二百里、近者二三十里(29)、與夫岡之花、谿之玉、橋之月。要皆非園中物、適然來獻(30)笑(31)乎吾、而吾亦適然有娛乎吾心。以是徵言四方是已。則其儉樸寡欲(32)(33)、三千里之外、足以想其人也(34)。毋乃大夫君家法(35)邪。雖然、大夫君昔者之適以娛、其撰胡不同也。孟子曰、彼一時也、此一時也(36)。大夫君業已膺大藩之徵(37)、名顯而仕榮、見獲乎其君、交孚乎其僚友(38)、以驩然乎其國人(39)之誦(40)。方是時、大夫君蓋亦有所娛云。父怒斯怒、父娛斯娛。故余觀乎文山之適乎娛、而知大夫君之時乎適已。雖然、大夫君豈能忘其昔者之適・不適乎聲色・溫飽之娛哉。則宮室(41)・玩好(42)之侈、文山不是適者。余謂之大夫君家法、非邪。乃孝子錫類之懿、信然乎哉。且也文山其猶卒歟。異日大夫君老、而文山承其家(43)也、無事(44)焉則羔羊之裘、退食委蛇(45)、猶之大夫君今者之適矣、萬一(46)有事(47)

焉則被レ堅執レ鋭、[48]爲二士卒之先一、[49]以敵二其君愾一、[50]亦何殊二乎大夫君昔者之適一邪。又聞文山好二讀書一、[51]善二筆翰一、[52]留二意風騷一、[53]彬彬乎質有二其文一哉。[54]海內諸君子頗有下賦レ詩稱二揚其事一者上。[55]余既已諾二依子之請一、乃又有レ想二其人一也、遂亦爲二歌六章一、繫二之序一焉乎爾。[56]

思二彼山中之人一兮、[57]跂予日夜以瞻望、[58]瑩乎空青一點、[59]兮、冀以レ餐レ爾俾二齡長一。[60]　右堆青嶂。[61]

山有二千秋雪一、[62]我欲二持以贈レ所レ親、雪邪雲邪、人云白雲兮、不レ堪二持二贈人一。[63]　右積雪嶺。[64]

日出兮照爛爛、[65]日入兮照爛爛、[66]日出入兮照爛爛、[67]不レ然園中人兮、胡以顏色如レ渥レ丹。[68]　右棲霞峯。[69]

蜿蜿乎兮聯者岡邪、[70]郁郁乎有レ花兮聯二其芳一邪、[71]岡上花邪長如レ許、[72]園中人邪樂無疆。[73]　右聯華岡。[74]

古人云石可レ漱乎、[75]乃漱レ之以レ玉哉、[76]瓊兮瑰兮、[77]粲粲兮盈二其掬一哉。[78]　右漱玉溪。[79]

寂寂兮園居、[80]誰邪羨者、誰邪來者、[81]度二溪橋之逶迤一、[82]兮、明月之窺レ我也。[83]　右渡月橋。[84]

〔語　注〕

(1)列子・湯問〈千變萬化、惟意所適〉。(2)(顧雲)上右司袁郎中啓〈吳波瀉淥秦岫堆青〉。(3)楚辭・九歌・湘君〈斲水兮積雪〉、(祖詠)終南望餘雪詩〈終南陰嶺秀、積雪浮雲端〉。(4)(李洞)詩〈盡有棲霞志、好謀三敎鄰〉。(5)(陸機)招隱詩〈飛泉漱鳴玉〉。(6)漢書・韋玄成傳〈坐與平通侯楊惲厚善〉、後漢書・岑彭傳〈彭與交趾牧鄧讓厚善〉。(7)後漢書・哀牢夷傳〈自言、我海西人〉。(8)宣和畫譜〈以墨之淺深映發〉。(9)禮記・曲禮上〈父之讐、弗與共戴天〉。(10)史記・晏平仲傳〈名顯諸侯〉。(11)詩・既醉〈孝子不匱、永錫爾類〉。(12)史記・三王世家〈皇子賴天、能勝衣趨拜〉、韓詩外傳〈身若不勝衣、言不出口〉。(13)漢書・匈奴傳贊〈其桀驁尙如斯〉、唐書・契丹傳〈魏靑龍中、部酋比能、稍桀驁〉。(14)易・隨〈係小子、失丈夫〉、孟子・滕文公上〈彼丈夫也、我丈夫也〉。(15)晉書・羊祜傳〈非皆無戰心、誠力不足相抗〉。(16)史記・晏嬰傳〈晏子長不滿六尺、…名顯

諸侯〉、（董仲舒）賢良策〈善積而名顯〉。（17）書・仲虺之誥〈惟王不邇聲色〉、史記・貨殖傳〈耳目欲極聲色之好〉、禮記・中庸〈聲色之於以化民末也〉。（18）（揚雄）益州牧箴〈自京徂畛、民攸溫飽〉、後漢書・馬皇后紀〈欲上奉祭祀、下求溫飽耳〉。（19）孟子・盡心下〈四肢之於安佚也、性也〉、漢書・司馬相如傳〈居位甚安佚〉。（20）論語・微子〈四體不勤〉、孟子・盡心上〈施於四體、四體不言而喻〉、禮記・中庸〈動乎四體〉。（21）禮記・祭義〈心志嗜欲、不忘乎心〉、孟子・告子下〈必先苦其心志〉。（22）書・五子之歌〈甘酒嗜音、峻宇彫牆〉。（23）莊子・徐无鬼〈君亦必無盛鶴於麗譙之間〉。（24）（謝偃）樂府新歌〈青樓綺閣已含春〉。（25）（左思）魏都賦〈珍樹猗猗、奇卉萋萋〉。（26）書・禹貢〈鉛松怪石〉。（27）（僧貫休）詩〈異禽佳草水潺潺〉、後漢書・莋都夷傳〈山神海靈、奇禽異獸、以眩燿之〉。（28）史記・三王世家〈澤及方外、故珍獸至〉。（29）漢書・杜周傳〈遠者數千里、近者數百里〉。（30）莊子・秋水〈時勢適然〉、漢書・賈誼傳〈以爲是適然耳〉。（31）莊子・大宗師〈獻笑不及排〉。（32）（白居易）策林〈人情儉朴、時俗清和〉。（33）孟子・盡心下〈其爲人也寡欲〉、莊子・山木〈少私而寡欲〉。（34）史記・孔子世家〈太史公曰、…我讀孔氏書、想見其爲人〉。（35）唐書・穆寧傳〈貞元間言家法者、尚韓穆二門云〉、後漢書・儒林傳〈各以家法敎授〉。（36）孟子・公孫丑下〈彼一時、此一時也〉。（37）易・睽〈遇元夫交孚〉。（38）禮記・曲禮上〈僚友稱其弟也〉、後漢書・鄭玄傳〈顯譽成於僚友〉。（39）列子・黃帝〈莫不驩然欲愛利之〉、漢書・董仲舒傳〈驩然有恩〉。（40）書・泰誓〈國人亦曰危哉〉、左傳・成公十三年〈子駟帥國人〉、孟子・梁惠王下〈國人皆曰賢〉。（41）易・繫辭下〈後世聖人易之以宮室〉、書・泰誓上〈宮室臺榭〉。（42）周禮・天官・太府〈以供玩好之用〉、左傳・襄公二九年〈玩好時至〉。（43）易・師〈開國承家〉。（44）史記・平準書〈國家無事〉、唐書・陸象先傳〈天下本無事〉。（45）詩・羔羊〈羔羊之裘、素絲五紽、退食自公、委蛇委蛇〉。（46）（白居

易）詩〈與君萬一爲交代〉。(47)論語・季氏〈季氏將有事於顓臾〉、左傳・襄公十年〈莒人間諸侯之有事也〉。(48)戰國・楚策〈吾被堅執銳、赴强敵而死〉、史記・項羽紀〈夫被堅執銳〉。(49)漢書・黥布傳〈以爲士卒先〉、戰國・齊策〈復整其士卒〉。(50)左傳・文公四年〈敵王所愾〉。(51)史記・刺客傳〈荆卿好讀書擊劍〉、漢書・張良傳〈少時家貧、好讀書〉。(52)晉書・陶侃傳〈筆翰如流、未嘗壅滯〉。(53)戰國・秦策〈願大王少留意〉、史記・樂毅傳〈惟君王留意焉〉。(54)（杜甫）夜聽許十一誦詩愛而有作詩〈風騷共推激〉、（高適）同崔員外詩〈晚晴催翰墨、秋興引風騷〉。(55)論語・雍也〈質勝文則野、文勝質則史、文質彬彬、然後君子〉、史記・酷吏傳〈太史公曰、…一切亦皆彬彬、質有其文武焉〉。(56)孟子・梁惠王上〈海內之地、方千里者九〉、戰國・秦策〈詘强國、制海內〉。(57)（蘇軾）赤壁賦〈橫槊賦詩〉。(58)莊子・庚桑楚〈又何足以稱揚哉〉、漢書・黃霸傳〈下詔稱揚〉。(59)楚辭・九歌〈山中人兮芳杜若〉。(60)詩・河黃〈跂予望之〉。(61)史記・高祖紀〈士卒、皆山東之人、日夜跂而望歸〉。(62)詩・燕燕〈瞻望弗及〉。(63)玉洞要訣〈空青似楊梅、受赤金之精甲乙陰靈之氣〉。(64)（岑參）送李明府詩〈嚴灘一點舟中月〉、（白居易）後宮詩〈雨露由來一點恩〉。(65)（杜甫）絕句詩〈窗含西嶺千秋雪〉。(66)（陶弘景）詔問山中何所有賦詩以答詩〈山中何所有、嶺上多白雲、只可自怡悅、不堪持贈君〉。(67)詩・羔裘〈日出有曜〉。(68)（司馬相如）上林賦〈磷磷爛爛、采色澔汗〉。(69)周禮・考工記・匠人〈爲規識日出之景與日入之景〉、穀梁傳・莊公七年〈日入至于星出〉。(70)漢書・禮樂志〈日出入、安窮、時世不與人同〉、莊子・襄王〈日出而作、日入而息〉。(71)史記・曹相國世家〈乃請參游園中〉、古樂府・傷歌行〈青青園中葵〉。(72)詩・終南〈顏如渥丹、其君也哉〉。(73)楚辭・離騷〈駕八龍之蜿蜿兮〉、（張衡）西京賦〈狀蜿蜿以蠕蠕〉。(74)論語・八佾〈郁郁乎文哉〉。(75)（宋之問）下山歌〈松間明月長如此〉、宋史・楊萬里傳〈吾頭顱如許〉。(76)

詩・七月〈萬壽無疆〉、（張衡）西京賦〈泱漭無疆〉。(77)晉書・孫楚傳〈誤云漱石枕流、…所以漱石、欲厲其齒〉。(78)（陸機）招隱詩〈飛泉漱鳴玉〉。(79)詩・渭陽〈何以贈之、瓊瑰玉佩〉。(80)詩・大東〈西人之子、粲粲衣服〉。(81)詩・椒聊〈蕃衍盈匊〉、（杜甫）佳人詩〈采柏動盈掬〉。(82)（左思）詠史詩〈寂寂楊子宅、門無卿相輿〉。(83)（王延壽）魯靈光殿賦〈巖突洞出、逶迤詰屈〉、古詩〈東城高且長、委迤自相屬〉。(84)（王維）竹里館詩〈深林人不知、明月來相照〉。

惟適園六景の叙[1]

惟適園とは、肥〔後〕藩の重臣中瀬氏[2]の子息である文山[3]が、自分の庭園に自ら命名したものである。その庭園には、六つの〔すぐれた〕景色がある[4]。堆青嶂といい、これは金峰のこと。積雪嶺といい、これは〔阿〕蘇山のこと。棲霞峰といい、これは温山のことである。〔その他は〕聯華岡、漱玉谿、度月橋という。

中瀬氏の弟である幻華上人[5]は、わが藩の依子[6]と親しく、彼を仲介として私に文章を依頼してきた。ところで、海西（九州）と東関（江戸）との距離は三千里にとどまらない。だから、庭園がどのような形状であるか、その景色がどれほどの感銘を与えるのかを知っているわけではない。しかし、〔惟適園と〕庭園に命名した理由ぐらいは述べられよう。

私は次のように聞いている。中瀬氏は、十三歳のときに〔相模国の〕芥川のほとりで父のかたきを討ったが、このことからその名は西国の諸侯に知られ、ついに大藩の仕官要請に応じたのだ、と。なんと孝行な子であることか。〔詩に〕孝子は尽きることなく出てくるとあるが、文山が「適」と命名した理由もこれでわかる。

父君が、かたきを討ったとき、わずか十三歳でまだ幼かった。ところが、かたきの相手は手のつけられない凶暴な大男であった。わずか十三歳という幼さで凶暴な大男を倒した時、後々の名声や仕官という栄誉は考えなかったはずだ。ましてや、歌舞・音曲や安楽な

生活のことなどは考えもつかなかったはずだ。ただ心の赴（適）くところにかな（適）っただけである。

いま、文山が庭園を「適」とする理由について、もちろん〔その庭園が〕どのような形状であるか、どれほどの感銘を与えるのかはわからないが、〔文山が〕誇っているものは、立派な塀構えや建物、素晴らしい樹木や草花や庭石、珍しい鳥獣にあるのではなく、遠ければ一、二百里、近くても二、三十里もさきにある阿蘇山・温山・金峰の名勝と、岡の花や谷の玉、橋の月といったものである。これらは皆庭園のなかにあるものではないが、「適然」として見る者に微笑みかけ、見る者も心から「適然」として楽しむのだ。こうした理由から、〔文山は〕四方の人々に、この庭園への批評を求めただけである。これほどにつつましく無欲であるから、三千里も離れた江戸の私でも、その人柄を容易に想い浮かべることができる。これは父君の家法ではなかろうか。

とはいうものの、父君の昔の「適」は怒りによるものであり、文山の今の「適」は楽しみによるものであって、同じではない。『孟子』に「彼も一時、此も一時〔で区別がない〕」とあるが、父君は、すでに大藩の仕官要請に応じ、名声や栄誉を得て、主君からとりたてられ、僚友と親交を結び、国の人々から褒めたたえられており、いまでは楽しむところがあるという。父が怒れば〔子も〕ともに怒り、父が楽しめば〔子も〕ともに楽しむ。だから私は、文山が楽しみに赴（適）くことをみて、父君におけるその時々の「適」がわかるのだ。とはいっても、歌舞・音曲や安楽な生活という楽しみによって、父君が、往年の「適」「不適」の違いを忘れてしまうことは決してない。だから、文山の楽（適）しみも建物や器物の贅沢にあるのではない。私が父君の家法というのも決して誤っていないだろう。つまり、まさしく、孝子は尽きることなく出てくるものなのだ。

くわえて、文山はまだ出仕してはいないそうだが、将来、父君が老いて文山が家督を相続したときには、

平穏であれば、重臣の衣服を着けて役所からしずしずと退くだろうが、これは、父君の現在の「適」と同じである。もしも戦いが起れば、鎧を着けて武器をとり、部下の先頭にたって主君の敵に立ち向かうだろうが、これは父君の往年の「適」と同じである。

私は、また次のように聞いている。文山は読書を好み、書画が得意で、風流なことに関心をもっていて、なんとも質実と文雅が調和している、と。国内の多くの君子が詩を作って、このことを褒めたたえている。私も、依子の要請を受け入れ、またその人となりを想い、歌を六章作ったが、〔それを〕この序文に続けて記そう。

山のなかにいるかの人を思い、昼も夜もつまさき立って遠くながめているが、あざやかな碧青が一つみえるだけだ。かの人に贈物を捧げることで長命を祈ろう。

右　堆青嶂

山に万年雪があれば、親しい人に贈物として持っていこう。しかし、雪だろうか、雲だろうか。人は白い雲だという。ならば、贈物になりはしない。

右　積雪嶺

日が昇るとき、爛々と照らし、日が沈むとき、爛々と照らす。日が昇るときも沈むときも爛々と照らしている。さもなくば、園のなかにいる人の顔色が、かくもあかあかとしているはずがない。

右　棲霞峰

ながながと連なっている岡、かぐわしい花も香りを連ねている。岡の上の花が、これほどまで長く続くなら、園にいる人の楽しみも尽きることがなかろう。

右　聯花岡

古人は石で口な漱ぐというが、玉で漱ぐのだろう。それは瓊であろうか、瑰であろうか、きらきらと輝いて手に溢れている。

右　漱玉渓

もの寂しい園にいる私を、誰が羨ましく思うだろ

う、誰が訪ねてくれるだろう。渓谷橋の長きを渡って、明月が私のことを照している。

右　渡月橋

〔訳　注〕

(1) 本篇の成立は、みすず書房版『荻生徂徠全集』第二巻所収の写真により、「正徳乙未秋八月」すなわち正徳五(一七一五)年と認められる。

(2) 中瀬氏は、『徂徠先生文集解』によると、もと松下姓を名乗り、名は豊長、通称助五郎という。父は源左衛門といい、熊本の加藤氏に仕えていたが、高市某によって殺害された。そこで豊長は、従者谷七蔵とともに敵を探し求め、相模国の芥川において敵を討った。そのために評判となり、初め土佐藩主が召し抱えようとしたが、新たに熊本藩主となった細川氏が、熊本に縁故のある人物というので土佐藩主に要請して家臣とした。そこで母方の姓である中瀬氏を名乗ったという。

(3) 文山は、『徂徠先生文集解』によると、通称は、助之丞といい、南河・柯庭とも号したという。文山は、のちに徂徠門下となった墨君徽(住江滄浪)の兄に当たる。なお、『徂徠集』巻二十四に「答中文山」三通が収録されている。

(4) 『徂徠文集便覧』および『徂徠先生文集解』には、服部南郭が墨君徽のために著した「快哉亭記」(惟適園のなかに造られた快哉亭について述べた作品)を引いて、次のように説明している。

金峰ハ園ヨリ西ニ距タルコト二十里、乃チ祇山ノ坳ヲ隔テ、棟宇望中ノ頂ニ出ヅル者半バス。蓋シ、蔵王ノ祠ナリ。…ソノ和州ノ芳野ニ肖タルヲ以テ、因テ呼ビテ金峰ト造ス。ソノ崖峭千尋、牆立シテ碧染ムルガ若シ。曰ク、堆青嶂、一ナリ。

園ノ西、長谷ノ界ヨリシテ北、復タ折レテ東シ、護国ノ阜ニ交ハル。岡ヲ環リテ白桜樹数百株ヲ植ウ。春華ニ至リテ、連乎トシテ雲ノ如シ。曰ク、聯華岡、二ナリ。

東方ニ特起スルハ、阿蘇ナランカ。蓋シ、山、城ヲ距テルコト数百里、翼然トシテ高ク居ル。亦、九州ノ間ノ一洞天ナリ。…雪積モラバ、則チ時ヲ歴テ消エズ。曰ク、積雪嶺、三ナリ。

肥ノ前、温山有リ。人、海西ノ芙蓉ト称ス。蓋シ、封外ナリ。西、百余里ニシテ之ヲ望メバ、其ノ奇ナルコト、猶尚ホ摘ムガ如シ。尤モ日ノ夕ニ奇ナリ。明滅来リ射ル。曰ク、棲霞峰、四ナリ。

園ノ東、十余武ニ渓有リ。前坡ニ沿テ下ル。ソノ水、湲湲トシテ北ヨリ来レバ、乃チ石ヲ受ケテ鳴ルコト、鏘鏘タリ。曰ク、漱玉渓、五ナリ。

漱玉以内ニ、又一小渓有リ。園ノ東南ニ辺シテ、曲リ、漱玉ニ至リテ、乃チ坡ヲ夾ミテ雙流ス。小橋、門ニ通ズ。月、東方ニ出ヅレバ、光、先ニ至リ、漸クニシテ乃チ園ニ盈ツ。曰ク、度月橋、六ナリ。

(5)『徂徠先生文集解』に、「南谷ト号ス。東寺ノ大通寺ニ住シ、幻華室ト号ス。上人、書ヲ善クシ、ソノ遺墨ハ、世人ノ愛玩スル所ト為ル」とある。

(6)『徂徠先生文集解』に「柳沢侯ノ大夫」とあるが、その他のことは未詳。

（澤井）

送左子嚴序

仙臺左子嚴將レ歸也、物子蓋有レ所レ屬云。初子嚴以レ畫名ニ其邦中一。已嗜レ書軼ニ乎畫一、已明レ詩嫺ニ文辭一、旁通ニ經史一、以盡ニ乎道一、可レ不レ謂ニ奇士一哉。惟昔庖羲觀ニ乎圖書契所レ興、本レ之則一已。乃子瞻・元章・子昂・徽明輩、率皆由レ此而達ニ諸彼一者爾。華夏雖レ大乎、古今茫茫、人物雲繁、尚何莫レ有下畫史而盡ニ乎道一者上也。畫而稱レ史、古之時蓋往往有レ之、則通ニ習載籍一、帝王盛衰之故、輿地山川所レ奠、禮樂所ニ以因革一、按レ圖而眎ニ諸掌一、多識ニ於鳥獸草木一以象レ之、有レ燁ニ其色一。吾思ニ其人一、而不レ得レ之矣。今乃獲ニ子嚴一哉。不佞茂卿、

小少潛[29]心風雅[30]、誦[31]其詩、尚[32]友其人。世代[33]夐邈、其聲音笑貌[34]之不レ可レ知、而諷詠[35]所レ至、神之與レ遇[36]、轉盻[37]之間、交二一臂一而失レ之[38]、則悵然[39]久レ之。遂歷二選鴻匠一、肇自[40]屈・宋[41]、西京魏晉[42]、唐之初盛[43]、以迄二有明一、亡慮[44]六十人、人采二一詩一、精神[45]所レ在、形[46]之丹青[47]、旦暮可レ遇。是豈俗工之所レ能哉。則非二子嚴一不レ可也。子嚴唯唯[48]。先レ是三年、富春山人、爲二采眞游[49]一以至レ奧、則子嚴相得レ驩[50]甚、以爲二奇遇[51]一也。今年余歲五十、徵二詩山人一、則子嚴具二書幣一致二賀不佞一。夢二寐[52]於吾黨[53]一、尋二藩臺見レ召、竭二來東都[54]一、則造謁二牛門[55]一、又以爲二奇遇一也。烏乎余甫艾、而子嚴踰レ耆。今也歸矣。其能可レ復邪。故山人之遇可レ恆、余之遇不レ可レ恆、則有レ憾二於奇一已。夫余夢二寐古人一、交二一臂一而失レ之[56]。是其憾、亦猶二子嚴之憾一邪。雖レ然夢二寐古人一、假[57]二手子嚴一。詩匪二余口出一乎[58]、乃自レ吾選レ之。畫匪二子嚴貌肖一乎[59]、迺自二子嚴一形レ之。子嚴攜歸、而余之遇可レ恆、畫成寄二于余一、而子嚴之遇亦可レ恆、則無レ憾二於奇一也。況六十古人、旦暮一堂[60]之上、子嚴之技、蓄以不朽[61]。其遇之奇、何啻余三人已乎。余有レ賴二於子嚴一也。子嚴唯唯。書以贈レ之、尚以成二其奇一哉。

〔語　注〕

(1)（蘇軾）周敎授索枸杞因以詩贈錄呈廣倅蕭大夫詩＜鄴侯藏書手不觸、嗟我嗜書終日讀＞。(2)（史岑）出師頌＜允文允武、明詩悅禮＞。(3)左傳・襄公二七年＜仲尼使擧是禮也、以爲多文辭＞、史記・屈原傳＜明於治亂、嫺於辭令＞。(4)易・乾＜六爻發揮、旁通情＞、法言・問明＜旁通厥德＞。(5)蜀志・尹默傳＜受古學、皆通諸經史＞。(6)史記・陳丞相世家＜雖有奇士、不能用＞。(7)易・繫辭下＜古者包犧氏之王天下也、仰則觀象於天、俯則觀法於地、觀鳥獸之文與地之宜、近取諸身、遠取諸物＞、書序＜古者伏犧氏之王天下也、始畫八卦、造書契、以代結繩之政、由是文籍生焉＞。(8)論語・子張＜本之則無＞。(9)詩・假樂＜率由舊章＞。(10)書・武成＜華夏蠻貊＞。(11)荀子・非相＜古今異情＞、禮記・三年問＜是百王之所

同、古今之所壹也〉。(12)左傳・襄公四年〈茫茫禹跡、畫爲九州〉、(陸機)歎逝賦〈何視天之茫茫〉。(13)漢書・匡衡傳〈然後能盡人物之性、可以贊天地之化〉、晉書・干寶傳〈寶撰集古今神祇靈異人物變化〉、(李白)明堂賦〈人物禽獸、奇形異模〉。(14)(王勃)別宴序〈雲繁雨驟、氣爽風馳〉。(15)莊子・田子方〈宋元君將畫圖、衆史皆至〉、(陸游)詩〈即今畫史無名手、試把清詩當寫眞〉。(16)史記・五帝本紀〈至長老皆各往往稱黃帝堯舜之處、風敎固殊焉〉。(17)漢書・哀帝紀〈上令誦詩、通習能說〉。(18)史記・伯夷傳〈夫學者載籍極博〉、後漢書・班固傳〈博貫載籍〉。(19)莊子・秋水〈帝王殊禪、三代殊繼〉。(20)莊子・天道〈盛衰之殺、變化之流也〉、漢書・藝文志〈蓋以別賢不肖而觀盛衰焉〉。(21)淮南子・原道訓〈以天爲蓋、以地爲輿〉。(22)書・禹貢〈奠高山大川〉。(23)論語・子張〈子曰、殷因於夏禮、所損益可知也〉。(24)史記・藺相如傳〈召有司案圖〉。(25)論語・八佾〈知其說者之於天下也、其如示諸斯乎、指其掌〉。(26)論語・陽貨〈邇之事父、遠之事君、多識於鳥獸草木之名〉。(27)左傳・定公九年〈思其人〉。(28)左傳・成公一三年〈寡人不佞〉。(29)(班固)與竇憲牋〈此大將軍少小時所服、今賜固〉。(賀知章)回鄉偶書詩〈少小離家老大回、鄉音無改鬢毛摧〉。(30)漢書・董仲舒傳〈下帷發憤、潛心大業〉。(31)(昭明太子)文選序〈風雅之道粲然可觀〉。(32)孟子・萬章下〈尙論古之人、頌其詩、讀其書、不知其人、可乎。是以論其世也、是尙友也〉。(33)漢書・外戚恩澤侯表〈世代雖殊、其揆一也〉。(34)孟子・離婁上〈恭儉可以聲音笑貌爲哉〉。(35)晉書・應詹傳〈優游諷詠、無所標明〉。(36)莊子・養生主〈臣以神遇〉。(37)後漢書・盧植傳〈未嘗轉聃〉。(38)莊子・田子方〈吾終身與汝交一臂而失之〉。(39)(宋玉)神女賦序〈悵然失志〉、資治通鑑・晉紀〈昶悵然久之而起〉。(40)(司馬相如)封禪文〈伊上古之初肇、自昊穹生民、歷數列辟、以迄於秦〉。(41)周書・庾信傳論〈摭六經百代英華、探屈宋卿雲之祕奧〉、(杜甫)戲爲六絶句詩〈竊擧屈宋宜方駕、恐與

齊梁作後塵〉。(42)後漢書・皇后紀上〈以纘西京外戚云爾〉。(43)(陶潛)桃花源記〈問今何世、乃不知有漢、無論魏晉〉。(44)漢書・趙充國傳〈亡慮萬二千人〉。(45)莊子・刻意〈精神四達竝流〉。(46)漢書・蘇武傳〈竹帛所載、丹青所畫〉。(47)莊子・齊物論〈萬世之後、而一遇大聖知其解者、是旦暮遇之也〉。(48)(司馬相如)子虛賦〈僕曰、唯唯〉。(49)莊子・天運〈古者謂是采遊之眞〉。(50)漢書・灌夫傳〈相得驩甚〉。(51)(鄧文原)題李思訓畫詩〈徽廟題來字字眞、把玩殷勤迺奇遇〉。(52)後漢書・郎顗傳〈夙夜夢寐〉、(謝靈運)酬從弟惠運詩〈夢寐佇歸舟、釋我吝與勞〉。(53)論語・公冶長〈吾黨之小子狂簡〉。(54)(司馬相如)大人賦〈同車竭來〉。(55)(班固)東都賦〈東都主人〉。(56)書・益稷〈觀古人之象〉、詩・綠衣〈我思古人、俾無訧兮〉。(57)書・伊訓〈假手于我有命〉。(58)書・秦誓〈自其口出〉。(59)莊子・達生〈凡有貌象聲色者、皆物也〉。(60)(白居易)竹窗詩〈未暇作廏庫、且先營一堂〉。(61)左傳・襄公二四年〈雖久不廢、此之謂不朽〉。

左子厳を送るの序[1]

仙台の左子厳[2]がまさに帰らんとするとき、物子は依頼することがあったという——

《最初、子厳は画家として藩中に名高かったが、書を嗜んで、画以上に優れ、また詩に明るく、文章に熟達し、あまねく經史に通じ、その道を究めたのであった。まことに「奇士」というべきではないか。昔、伏義はさまざまな自然現象を観察し画や文字を興したのだから、画や文字のもとをたずねれば、じつは一つのものである。だから、蘇軾[3](子瞻)・米芾[4](元章)・趙孟頫[5](子昂)・文徵明[6]たちは、みなこういうことによって画も書もともに秀れた域に達したものなのだ。

中国は、国土が広いとはいえども、歴史は遠くはるかにさかのぼり、いろいろな人や物が雲のごとく集まっているので、そのなかになお、その道を究めた「画史」がいなかったわけではない。画家であって史家を

称するものは、古にときおり存在し、典籍に通暁し、帝王の盛衰のこと、大地山川の位置、礼楽が〔前代に〕因りながら改まっていった有り様、これらの事柄を図によってはっきりわかるように示し、鳥獣草木について多く識り、その形を描き、鮮やかに色さえ塗ったものであった。(7) 私は（今日において）そうした人に会いたいと思っていたが、得られなかった。ところが、今、子厳を獲たのだ。

私、茂卿は、幼いころから、風雅に心を潜め、詩人を友とし、その詩を誦していたが、時代がはるか離れていたので、その声や笑顔を知ることはできなかった。朗誦の極致では、私の精神が詩人の精神に遭遇するが、それはほんのわずかの間であって、その交わりはすぐに失われてしまい、ながながと溜め息をつくばかりであった。かくて秀れた詩人、屈原・宋玉に始まり漢・晋、初唐・盛唐、明に至るまで六十人、人ごとに詩一首を選び、その精神を絵画に表現することとした。〔そうすれば〕朝晩かれらに会えるのだ。これは、凡庸な画工にできることではなく、子厳でなければできないことだ。》

子厳はうなづいた。

《これより三年前、富春山人(8)は自由で質素な生活をなさんとして、奥州へ赴いたのだが、子厳は彼と厚く友情を交わし、「奇遇」だとした。今年、私は五十歳、詩を山人に求めたのだが、子厳もまた書状と贈り物とを具えて、私を祝福した。わが一門のことを夢にまで見たというのだ。まもなく、藩主の参勤交代があり、東都へやってきたさい、やはりまた、思いもかけず牛込の私のところを訪れ、「奇遇」だとした。

ああ、私は五十才、子厳は六十才をこえた。今や、帰ってしまえば、ふたたび会えるであろうか。山人とはつねに会えるが、私とはつねに会えるというわけにはいかない。このたびの思いもかけない出会いを名残り惜しく思うばかりだ。そもそも、私は古人を夢みても、その交わりはあっという間に失われてしまう。その名残り惜しさは、子厳を名残り惜しく思う気持ちと

同じだ。しかし、古人を夢みるには、子厳の手を借りればよい。詩は私の口から出たものではないが、それでも私みずからが選ぶ。画は子厳の肖像ではないが、それでも子厳が描く。子厳が〔私の選んだ詩を〕携えて帰れば、（子厳は）私につねに会うことができ、画が完成して、私に送ってよこせば、（私は）子厳につねに会うことも、またできる。その思いがけない出会いを名残り惜しく思うことはなくなるのだ。ましてや、六十人もの古人が朝晩一堂に会するのだ。子厳の技はかくて不朽となるのだ。思いがけず出会えること、どうしてわれわれ三人だけに限られようか〔六十人もの古人とも思いがけず出会えるのだ〕。だから、私は、子厳に依頼するのである。》

子厳はうなづいた。

そこで〔序を〕贈り、その「奇遇」を形に残すのである。

〔訳　注〕

（1）　正徳五（一七一五）年、徂徠五十歳のときの作。

（2）　佐久間洞巌、字は子厳、洞巌は号。仙台の人。元文元（一七三六）年、八十四才で死去。書を好み、また山水をよくす。中年になって遊佐木斎に学び、また新井白石とも親交があった。著書に「奥羽観跡聞老志」、「五十四郡考」、「塩釜松島図記」、「名取郡志」、「復讐紀事」、「容軒書画譜」、「太白山人文集」などがある。「与富春山人」第二書（「徂徠集」巻二十二所収）によれば、徂徠のほうから仙台にいる富春山人をとおして洞巌の一幅を求めたい希望があった。この希望に答えて本文中にもあるように、洞巌は徂徠に「具書幣致賀」したのである。なお「徂徠集」（巻二十五）には子厳あての手紙が四通収められている。

（3）　蘇軾、字は子瞻、号は東坡居士。北宋の人。詩は宋代随一と称せられ、文も唐宋八大家の一人、書に優れ、あわせて画に巧み。ことは「宋史」巻三百

三十八の伝にみえる。

（4）米芾、字は元章。北宋の人。書に優れ、山水人物をもよくす。ことは「宋史」巻四百四十四の伝にみえる。

（5）趙孟頫、字は子昂、元の人。文章に優れ、ことに行楷の書に巧み、また山水もよくす。ことは「元史」巻百七十二の伝にみえる。

（6）文徴明、名は璧、徴明は字。明の人。詩文に優れ、書画に巧み。ことは「明史」巻二百八十七の伝にみえる。

（7）これらの記述に関連する書籍として「経子史要覧」巻下には「歴代帝王世系之図」が、また「示木公達目」には「大明一統志」「広輿記」「月令広義」「本草綱目」「群芳譜」が挙げられている。

（8）富春山人、田中省吾については「香国禅師の六十を賀するの序」の訳注（3）を参照のこと。

（岡本）

壽下館侯五十初度序

是歳正徳乙未、下館侯行年五十矣。覽揆之辰、實爲十二月辛丑、則自友邦六・七君侯、或姻好或否、暨舊所與共事口先朝侍從之臣、暨御大夫、出而奉朝請者、以至於其它貴介公子・薦紳先生之徒、諸所與侯游處相厚善者、咸莫不各篚其篚脩其辭、以言其所爲欲祝侯之意、而致諸下執事、爲之壽也。是日蓋滿堂云。則有客遠自金華之陰來、見物子牛門之廬者。既見、再拜以請曰、某者塞以外鄙人也。昔嘗仕于上國、有獲戾於其君焉、乃以不能自靖乎位也、承淅以去。去之日、舊君俾其士師大索國中弗獲也、則將以窮諸海内、而錮某之所往焉。當是時、某殆乎不能逭其死矣。而唯侯之一言、乃得以紓舊君之怒。俾某不死者、豈非侯之錫乎。然侯未嘗有一日讙于某也、而直道以

言レ之。是豈有ニ德心一(37)哉、則天地之德(38)矣。某惷愚(39)豈敢一日能忘ニ天地之德一邪。某昔在ニ上國一、亦嘗習ニ聞於侯(40)齒與ニ其嶽降(41)之日一、則奮然思ニ欲效(42)一ニ言(43)之祝于侯一、以及ニ今日之事一、而不レ可レ遏也、以故不レ遠ニ千里(44)一、裹レ糧(45)南來。乃路過ニ于常山之麓、侯之封國(46)一也、則見下一丈人植(47)ニ杖(48)其道傍一、與ニ少者(49)相顧語(50)上焉。丈人曰、天邪父母邪、我侯之封ニ於斯邦一也、十ニ有餘年于茲一、而民不レ死ニ乎刑一矣。以下我燥髮(51)所ニ睹記一、先祖考(52)所ニ傳道一者上、未レ有ニ侯之盛一也。少者曰、烏乎胡以能長ニ我侯之齡一、以終ニ我世一乎(53)哉。胡以能俾ニ我侯有ニ子善肖(54)之一、以終ニ我子孫之世一乎(55)哉。胡以能恢ニ大我侯之封一、以俾下我親戚兄弟(56)在ニ竟外一者皆霑中其德上乎(57)哉。某怪焉語以ニ今日之事一、則不レ識也。曰、侯家典禮(58)、何有ニ乎我儕小人一。小人每レ飯(59)焉、則其心未ニ嘗不レ在ニ我侯一也、是已。某於レ是幡然(60)以爲是雖ニ古之善禱一、莫ニ之尚一已、何必稱レ觴(61)薦ニ其辭侯之前一、而後爲レ爲レ祝也。某居嘗(62)所ニ爲祝ニ乎侯一者、亦乃天保(63)不レ啻(64)哉。朝焉則欲ニ其如ニ日之升一(65)矣。莫焉則欲ニ其如ニ月之恆一(66)矣。瞻ニ彼南山一焉、則欲ニ其壽之不レ騫不レ崩(67)矣。瞻ニ彼川流一(68)焉、則欲ニ其福祿(69)方至、以莫レ不レ增(70)矣。于レ岡焉乎、如レ岡(71)矣。于レ阜焉乎、如レ阜(72)矣。于ニ丘陵一焉乎、如ニ丘陵一(73)矣。于ニ松柏之茂一焉乎、則亦欲ニ其如レ莫ニ或不レ承(74)矣。是可ニ以已一邪、然未レ有ニ以辯一也。故又枉ニ道子之廬一、而敢子之教(75)是請。物子聞レ之、喟然(76)嘆以興曰、侯之德、其遠矣哉。遠者壽之徵也。夫有レ識焉、有レ不レ識焉、莫レ不ニ皆頌ニ侯之德一焉。有レ至焉、有レ不レ至焉、莫レ不ニ皆欲ニ侯之壽一焉。其斯之謂(77)レ遠也邪。夫今日之事、堂上之辭(78)、亦莫レ不ニ皆頌ニ侯之德一已。其友邦之君、則能言ニ侯之善隣一乎(79)。姻好稱レ仁、否者義乎。其舊所ニ與共事一者、則侍從之臣稱レ忠乎、轡御大夫稱レ敬乎、出而奉ニ朝請一者、亦能言ニ其同寅協共(80)之懿一乎。貴介公子以レ禮、薦紳先生以ニ道藝一、諸所ニ與レ侯游處一相厚善者、亦各莫レ不下皆致中其所ニ爲欲レ祝レ侯之辭上已。然是皆侯之所ニ素識一焉、而分當レ至焉者、其辭雖ニ人人殊一、要レ之豈皆出ニ於華封(81)・天保之上一哉。唯客與ニ丈人一之言、而後識ニ侯之德遠一矣哉。侯之壽、豈有レ窮已乎。夫頌ニ其德一而至ニ於天地一

焉、悠久之徵、非邪。不佞茂卿、侯之外臣也。廼蒙弗〻鄙、延而相見二一堂之上一、歲時則五馬之貴、儼然以辱二臨乎敝廬一焉。則又以二其同〻齒一、而其雲漢之章、亦嘗賁二及其丘園一焉。則欲下一言以頌二侯德一祝中侯壽上、而不〻可〻得也。而今而後、乃始得二其辭一哉。夫有〻識焉、有〻不〻識焉、有〻至焉、有〻不〻至焉、分定故也。爾施、吾其代〻爾而稱二爾祝于侯之前一哉。則常山丈人亦與有〻榮哉。客大喜再拜而去。遂錄二其言一、以致二諸下執事一。嗚呼侯之德遠矣哉、其不〻識焉而不〻至者亦何限。侯之壽、果乎其莫〻有〻窮已也。

〔語　注〕

(1)楚辭・離騷〈皇覽揆餘初度兮〉、(謝應芳)歲暮獨歸詩〈勿驚初度過庚寅〉。(2)莊子・天道〈行年七十老斲輪〉、同・寓言〈行年六十、而六十化〉、列子・天瑞〈吾既已行年九十矣〉。(3)楚辭・離騷〈皇覽揆餘初度兮〉。(4)書・泰誓上〈嗟我友邦冢君〉。(5)史記・絳侯周勃世家〈君侯欲反邪〉、漢書・劉屈氂傳〈願君侯早請昌邑王爲太子〉。(6)詩・小旻〈或聖或否〉。(7)儀禮・士冠禮〈某不敏、恐不能共事〉、漢書・鼂錯傳〈幼則同遊、長則共事〉。(8)(曹植)與楊德祖書〈昔揚子雲、先朝執戟之臣耳〉。(9)漢書・外戚傳〈皇后輦駕、侍從甚盛〉、(班固)兩都賦序〈故言語侍從之臣〉。(10)詩・雨無正〈曾我暬御〉。(11)書・說命中〈樹后王君公、承以大夫師長〉、禮記・王制〈天子三公九卿、二十七大夫〉。(12)史記・吳王濞傳〈身有內病、不能朝請〉、後漢書・和殤帝紀〈奉朝請者黃金〉。(13)(劉伶)酒德頌〈有貴介公子、搢紳處士〉。(14)史記・五帝紀贊〈薦紳先生難言之〉、監鐵論・褒賢〈薦紳之徒〉。(15)晉書・宣帝紀〈魏武爲丞相、辟爲文學掾、使與太子游處〉。(16)漢書・韋玄成傳〈坐與平通侯楊惲厚善〉、後漢書・岑彭傳〈彭與交趾牧鄧讓厚善〉。(17)書・禹貢〈厥篚織文〉。(18)易・乾〈脩辭立其誠〉。(19)禮記・雜記下〈對曰、文公之下執事也〉。(20)史記・信陵君傳〈賓客滿堂〉、老子・九〈金玉滿堂〉。(21)詩・有客序〈有客、微子

來見祖廟也〉。(22)詩・汝賁〈既見君子〉。(23)書・顧命〈王再拜〉、儀禮・鄉飲酒禮、禮記・曲禮下〈再拜稽首〉。(24)戰國・魏策〈翟璜逡巡再拜曰、璜鄙人也〉、史記・馮唐傳〈鄙人不知忌諱〉。(25)左傳・昭公二七年〈使延州來季子聘于上國〉、同・定公四年〈以荐食上國〉。(26)左傳・昭公元年〈吉若獲戾、子將行之〉。(27)詩・小明〈靖共爾位〉。(28)孟子・萬章上〈孔子之去齊、接淅而行〉、注〈接、承也〉。(29)孟子・離婁下〈去之日、遂收其田里〉。(30)儀禮・喪服〈爲舊君之母妻〉、孟子・離婁下〈禮爲舊君有服〉。(31)周禮・秋官・士師〈士師之職〉、論語・微子〈柳下惠爲士師三黜〉、孟子・梁惠王下〈士師不能治士、則如之何〉。(32)史記・秦始皇紀〈大索逐客〉、漢書・張良傳〈大索天下〉。(33)孟子・梁惠王上〈海內之地、方千里者九〉、戰國・秦策〈詘强國、制海內〉。(34)孟子・離婁下〈有故而去、則君搏執之、又極之於其所往〉。(35)孟子・滕文公上〈當是時、陽貨先、豈不得見〉。(36)論語・微子〈直道而事人〉、同・衞靈公〈三代之所以直道而行也〉。(37)詩・泮水〈克廣德心〉。(38)易・繫辭下〈天地之大德曰生〉。(39)禮記・表記〈其民之敝、愚而愚〉。(40)漢書・董仲舒傳〈習聞其號、未燭厥理〉。(41)詩・崧高〈維嶽降神〉。(42)(歐陽脩)王彥章畫像記〈獨公奮然自必〉。(43)(魏武帝)苦寒行〈思欲一東歸〉。(44)論語・爲政〈一言以蔽之〉、左傳・昭公三年〈晏子一言、而齊國省刑〉。(45)書・牧誓〈今日之事不愆于六步七步〉、孟子・離婁下〈今日之事君事也〉、左傳・宣公二年〈今日之事我爲政〉。(46)孟子・梁惠王上〈叟不遠千里而來〉、戰國・韓策〈仲子不遠千里、枉車騎而交臣〉。(47)孟子・梁惠王下〈行者有裏糧也〉。(48)周禮・夏官・大司馬〈制畿封國、以正封國〉。(49)論語・微子〈遇丈人以杖荷蓧〉、淮南子・道應〈狐邱丈人〉。(50)論語・微子〈植其杖而芸〉。(51)後漢書・馮異傳〈光武引車入道傍空舍〉、(杜甫)兵車行〈道傍過者問行人〉。(52)論語・公冶長〈少者懷之〉、(歐陽脩)吉州學記〈少者扶其羸老〉。(53)(白居易)長恨歌〈君臣

相顧盡沾衣〉。(54)宋史〈魏主大怒曰、我生髮未燥、已聞河南是我地〉。(55)史記・魏世家〈以耳目之所覩記〉。(56)禮記・禮運〈以降上神與其先祖〉、左傳・襄公十四年〈纂乃祖考〉、易・豫〈以配祖考〉。(57)周禮・夏官・訓方氏〈誦四方之傳道〉。(58)禮記・儒行〈終沒吾世〉。(59)書・泰誓〈不能保我子孫〉、禮記・大學〈以能保我子孫黎民〉。(60)唐書・惟貞傳〈志尚恢大〉、荀子・非十二子〈橋宇〉注〈宇、大也、放蕩恢大也〉。(61)禮記・曲禮上〈兄弟親戚稱其慈也〉。(62)禮記・喪大記〈在竟外則殯葬可也〉。(63)易・繫辭上〈以行其典禮〉、左傳・宣公十二年〈德刑政事典禮不易〉。(64)左傳・宣公十一年〈吾儕小人、所謂取諸其懷而與之也〉。(65)漢書・馮唐傳〈吾每飲食、意未嘗不在鉅鹿也〉、左傳・哀公十四年〈左師每食擊鐘〉。(66)孟子・萬章上〈既而幡然改〉、荀子・大略〈幡然遷之〉。(67)禮記・檀弓下〈君子謂之善頌善禱〉。(68)北史・周宗室傳〈稱觴爲壽〉、史記・滑稽傳〈奉觴上壽〉。(69)史記・淮陰侯傳〈居常鞅鞅〉、後漢書・崔瑗傳〈居常疏食菜羹而已〉。(70)詩・天保〈天保定爾〉。(71)書・泰誓〈不啻若自其口出〉。(72)詩・天保〈如日之升〉。(73)詩・天保〈如月之恆〉。(74)詩・天保〈如南山之壽、不騫不崩〉。(75)(揚雄)劇秦美新〈川流海渟〉、晉書・裴秀傳〈山海川流〉。(76)詩・瞻彼洛矣〈福祿如茨〉、同・鴛鴦〈福祿宜之〉。(77)詩・天保〈如川之方至、以莫不增〉。(78)詩・天保〈如岡如陵〉。(70)詩・天保〈如山如阜〉。(80)易・坎〈地險、山川丘陵也〉、孟子・滕文公上〈雖若丘陵、弗爲也〉。(81)詩・天保〈如岡如陵〉。(82)詩・天保〈如松柏之茂、無不爾或承〉。(83)穀梁傳・文公六年〈可以已也〉。(84)戰國・韓策〈仲子不遠千里、枉車騎而交臣〉、論語・微子〈枉道而事人〉。(85)左傳・襄公十一年〈子之敎敢不承命〉。(86)論語・先進〈夫子喟然歎曰〉、孟子・盡心上〈喟然歎曰〉、禮記・禮運〈喟然而嘆〉。(87)論語・學而〈其斯之謂與〉。(88)儀禮・聘禮〈堂上八豆〉、同〈堂上之饌八〉。(89)左傳・隱公六年〈親仁善鄰、國

之寶也〉、國語・晉語〈在親衆而善鄰〉。(90)書・皐陶謨〈同寅協恭、和衷哉〉。(91)周禮・天官・小宰〈會其什伍而敎之道藝〉、同・地官・鄉大夫〈察其道藝〉。(92)史記・曹相國世家〈諸儒以百數、言人人殊〉。(93)莊子・天地〈堯觀乎華、華封人曰、嘻聖人、請祝聖人、使聖人壽、堯曰、辭、使聖人富、堯曰、辭、使聖人多男子、堯曰、辭、…是三者、非所以養德也、故辭〉。(94)禮記・中庸〈悠久所以成物也、…悠久無疆〉。(95)左傳・成公十三年〈寡人不佞〉。(96)儀禮・士相見禮〈他國之人、則曰外臣〉。(97)禮記・曲禮下〈相見於郊地曰會〉。(98)漢書・鼂錯傳〈先爲築堂、家有一堂〉、(李擧龍)報孫金吾書〈今安得其人焉而晤語一堂之上、以是尙友焉〉。(99)周禮・春官・占夢〈占夢掌其歲時、觀天地之會、辨陰陽之氣〉、史記・封禪書〈令太祝盡以歲時致禮〉。(100)(枚乘)日出東南隅行〈使君從南來、五馬立踟躕〉、清夜錄〈漢制、…東方朔傳、大守駟馬駕車、一馬行春〉。(101)晏子・問下〈夫儼然辱臨敝邑〉、禮記・檀弓下〈儼然在憂服之中〉、論語・子張〈望之儼然〉、禮記・檀弓下〈有先人之敝廬在〉。(102)詩・棫樸〈倬彼雲漢、爲章于天、周王壽考、遐不作人〉。(103)易・賁〈賁于丘園、束帛戔戔〉。(104)論語・泰伯〈而今而後吾知免夫小子〉。(105)孟子・盡心上〈雖窮居不損焉、分定故也〉。(106)詩・人何斯〈爾還而入、我心易也〉。(107)莊子・在宥〈人大喜邪〉。

下館侯の五十の初度を寿ぐの序[1]

正德乙未(五年)というこの年、下館侯(黑田直邦)[2]は五十歳になった。誕生日の十二月辛丑(三日)には、友邦の六、七人の大名で姻戚にある者もない者、また前将軍(綱吉)の御小姓として仕えていた者、将軍の側近や大名である者[3]を始めとして、その他、高貴な家の若い人々や儒者、侯と一緒に遊び楽しんだ多くの親しい者たちまでが、お祝いする気持ちを美しい箱と文章にこめて侯のもとに届け、それぞれ寿ぎとした。この日は、〔こうしたお祝いの人々で〕屋敷は一杯にな

ったという。

ところで、遠く金華山の向こう側から、一人の客人[4]が牛込にある私の家にやって来た。挨拶が済むと、また深々と頭を下げて、つぎのような依頼をした――

《私は、辺境に住む田舎者です。昔、あなたと同じ国[5]に仕えていましたが、御主君から処罰を受けたために仕えていられなくなり、急いで〔国を〕立ち去ることになりました。立ち去るときに、元の御主君は藩士を動員して国中を捜索させ、見つからないと、全国に手を回して、私の行く場所をなくさせました。この時、私はほんとうに死を逃れられない状態でした。しかし、下館侯の一言によって元の御主君の怒りも解けたのです。私が死なずにいられたのは、侯のお陰です。しかも、それまで侯は私のことをよく知らなかったのですが、道理に基づいて言って下さったのです。これは、人の徳心というよりは、まさしく天地の徳そのものです。私は、愚かですが、天地の徳を一日たりとも忘れたことはありません。

昔あなたと同じ国に仕えていたとき、私は侯の御年と誕生日とをしばしば耳にしていましたので、お祝いを是非とも一言申し上げようと思っていました。そこで、今日というお祝いの日になると、いてもたってもいられなくなり、遠い道程をものともせずに南下して来ました。その途中、筑波山の麓にある侯のお国[6]を通り過ぎるとき、一人の老人が道端で杖をつき、若者と話しているのをみかけました。『わが殿様は、この国にとってまるで天か父母のようだ。民人が死刑になることもなく十年以上が経つ。わしが生まれた頃からみてきたことと、父祖から聞いたこととをあわせてみても、これほどすばらしいときはない』と老人が言うと、若者が『ああ、なんとかわが殿様が長生きをなされて、わたしらの〔幸せな〕時代を過ごしたいものだ。なんとかわが殿様によく似たお世継ぎができて、わたしらの子孫に〔幸せな〕時代を過ごさせたいものだ。またわが殿様の領国が大きくなって、わたしらの兄弟・親戚などのよそに住むものたちにも殿様の徳の

庇護をわけてやりたいものだ』と言いました。私が驚いて今日のお祝いについて話すと、それは知りませんでした。そして『わたしら下々のものが、どうして殿様の典礼を知っていましょう。わたしらはいつも食事をとる度に、わが殿様のことを思っているのです』と言うだけでした。

そこで私は、いにしえの立派な寿ぎの言葉でもこれに優るものはない、杯をあげて侯に寿ぎの文章を献呈することだけがお祝いすることではないと思い直しました。私が、つねに侯のことを祝福していることは、〔詩の〕「天保」で歌われたことよりも勝っています。朝には日が昇るようであって欲しいと、また夕べには月が変わらぬようであって欲しいと、南山をみれば寿命が〔南山と同じく〕欠けたり崩れたりすることがないようにと、また川の流れをみれば福禄が〔川と同じく〕いつも増え続けるようにと、あらゆる丘陵をみる度に丘陵のよう〔に大きく盛ん〕であって欲しいと、松や柏が茂っているのをみれば、〔松や柏が〕常に青青としているように続いて欲しいと願っています。(7)

私の気持ちはこれに尽きるのですが、残念ながらきちんと言えません。そこであなたのお宅に立ち寄って、あなたのお教えを請いたいと思ったのです。》

私はこのことを聞いて、心から感嘆して次のように述べた——

《下館侯の徳はほんとうに遠大である。〔徳が〕遠大であることは、長寿のしるしである。侯と顔見知りの者も、そうでない者も、皆が侯の徳を褒め称える。〔お祝いのために侯のところに〕行く者も、行かない者も、皆が侯の長寿を願う。これが、つまりは遠大だということである。

今日のお祝いでは、侯に届けられた寿ぎの文章のなかで侯の徳を褒め称えないものはないはずだ。友邦の大名は侯の厚い友好について称え、姻戚にある者は侯の「仁」を、そうでない者は「義」を称えよう。前将軍〔綱吉〕の御小姓として仕えていた者は侯の「忠」について、また将軍の側近である者は侯の「敬」につ

いて、大名である者は侯とともにつつしんで勤めていることを述べるだろう。高貴な家の若い人々は「礼」について、儒者は「道芸」について述べ、侯と一緒に遊び楽しんだ多くの親しい者たちまでもが、それぞれ侯をお祝いしようという気持ちを込めた文章を差し上げるだろう。しかし、彼らは皆、侯がもとから顔見知りの人々であり、〔彼らの〕「分」[8]として侯のもとに行く人々である。彼らの言葉は、それぞれ違っているにしても、〔富・多男子・寿という〕「華封」の三祝や〔詩の〕「天保」以上のものではない。ただ、あなたと老人の言葉によってのみ、侯の徳の遠大なことがわかるのだ。侯の寿命はほんとうに窮まるところがないだろう。そもそも、徳を褒め称えて天地になぞらえるのは、悠久である証拠、これは間違いがない。

私、茂卿は、下館侯の家臣ではない。しかし、丁重に扱われ、さらには侯との同座を許されたことも、四季には高貴な御身をわざわざ我が家に運ばれるという栄誉を受けたこともある。さらには、年齢が同じだというので、天河の輝くような文章で私の隠居所を飾ってくださったこともある。だから、侯の徳を一言でも褒め称え、長命をお祝いしたいと思っていたのだが、果たすことができなかった。いまここに、その寿ぎの言葉を得た。顔見知りであるかないか、〔お祝いに〕行くか行かないかは、それぞれの定まった「分」である。あなたが帰るならば、あなたに代って私がお祝いを申し上げよう。そうすれば、筑波山の麓の老人も、あなたと一緒に栄誉があるというものだ。》

客人は、とても喜んで、深々とお辞儀をして立ち去った。そこで、この文章を記して、侯のもとに届けよう。ああ侯、の徳はなんとも遠大である。侯と顔見知りではない者や侯のもとにお祝いに行っていない者も、まだ他にいるに違いない。とすれば、侯の寿命はほんとうに窮まるところがない。

〔訳　注〕

（1）　本篇の成立は、本文中の「正徳乙未」から正徳

五(一七一五)年であることが分かる。

(2) 下館侯とは、黒田豊前守直邦のことであり、号を琴鶴という。綱吉の御小姓を勤め、また柳沢吉保の女婿にあたるために、徂徠の有力な庇護者の一人となった。また、のちの吉宗の時代にも重用され、老中まで進んだ。なお、『徂徠集』巻二十に「与下館侯」二通が収録されている。

(3) この箇所は、原文「暨舊所與共事口先朝侍從之臣、㷀御大夫、出而奉朝請者」とあるのに対する訳であるが、徂徠がどのような人物を想定していたのか、具体的なことが分からないため、仮に訳出した。

(4) この客は、田中省吾(富春山人)と推定される。田中省吾は、徂徠と同じく柳沢吉保に仕え、宝永三(一七〇六)年、徂徠とともに甲府に行ったときの逸話は「風流使者記」「峡中紀行」に見える。しかし、正徳三(一七一三)年、吉保の側近を斬り逃亡した。その際、徂徠や安藤東野によって援助を受けていたが、さらに本篇によれば黒田直邦の庇護もあったと認められる。

(5) 原文「上国」には、都に近い国、上方、貴国といったさまざまな意味がある。ここでは、典拠の確認はできていないものの、貴国という意味で解釈した。

(6) この時期の黒田直邦の封国は、常陸国の下館であった。また、筑波山は、田中桐江が逃亡中に隠れていた場所でもあった。

(7) この箇所は、語注に示したように、『詩』の天保をふまえている。

天保定爾、亦孔之固、俾爾単厚、何福不除、俾爾多益、以莫不庶。
天保定爾、俾爾戩穀、罄無不宜、受天百禄、降爾遐福、維日不足。
天保定爾、以莫不興、如山如草、如岡如陵、如川之方至、以莫不増。
吉蠲為饎、是用孝享、禴祠蒸嘗、于公先王、君曰

ト爾、万寿無疆。
神之弔矣、詒爾多福、民之質矣、日用飲食、群黎百姓、徧為爾徳。
如月之恒、如日之升、如南山之寿、不騫不崩、如松柏之茂、無不爾或承。

（8）徂徠が、ここで各自の定められた「分」を強調していることに留意したい。

（澤井）

訳注稿（二）の訂正

p.28　「宜若㆓或有㆒彼……」→「宜㆑若㆓或有㆒彼……」

p.29　「是其所㆓以避㆒秦者、以㆑詩不㆑以㆑人也」→「是其所㆓以避㆒秦者、以㆑時不㆑以㆑地也、是其所㆓爲自詫㆒桃源㆒者、以㆑詩不㆑以㆑人也」

p.41　注(31)の顧起元は、明の人。著に「金陵古金石表」がある。

p.42　「三數年于㆑茲矣」→「三㆓數年于茲㆒矣」

p.53　「廣陵問槎錄序」の「允明於㆓東都㆒鳳翼於㆓西都㆒、而一繫㆓之廣陵㆒者、所㆑事之國治在㆑是」の翻訳について。「廣陵問槎錄」所収の允明、鳳翼の詩文によれば、允明は江戸で、鳳翼は大阪で、それぞれ朝鮮通信使一行と会見している。この事実からすれば、当該箇所は次のように訂正される。

「允明は江戸において、鳳翼は大阪において詩文を交換したにもかかわらず、これを『広陵問槎録』と命名したのは、両者の仕えた国の中心が広島にあったからである」。

なお、訳注稿（二）について多くの方々から様々な御教示を得ました。深く謝意を表するとともに、今後の読解に生かしていきたく存じます。